
V i v i d って何だろう？

餅っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Vividって何だろう？

【Nコード】

N3062Z

【作者名】

餅っち

【あらすじ】

私が今連載中のISのSSの主人公の弾がもしもリリカルなのはの世界に転生していたらという、ある意味IFのお話です。息抜き&電波受信MAX状態&IS本編優先のため、更新は遅めと
いうか、そんな状況です。

そして、駄文ですが、それでも構わない！と言う方はどうぞ。

最新話で行っているアンケートですが、締め切りました！

結果は活動報告に載せてますので、ご覧いただければ幸いです。

第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ(ドヤア)！！と考えている内は幸

輪廻転生。

いきなりなんのこっちゃ？ と言いたくなるだろう。

俺だつて見ず知らずの人間からいきなりこんな事を言われたら、
まあ、なんだな引くな。

そんな言葉、輪廻転生というものを俺は体験した。

二次創作とかSSとか言われている奴で言われている【神様転生】
って奴だな。

まあ詳細は割愛するけれど、イロイロな特典貰った俺は転生した
んだよ。

神様(おっぱおの大きい女神様でした。あのマシユマロの感触は
今でも覚えてます……)が言っていたある世界に転生したはずなん
だが、生まれて今現在8年の月日が流れている。

因みに、この世界について大体の予想がついたのは四歳辺りの頃
だったかね、ミッドチルダ、んでもってベルカ…… という二つの
地名。

そして、俺が住んでいるのはミッドチルダとベルカの間にある都
市。

もしかして、あの、お話と書いて【全力砲撃でブッ飛ばす!!】
という恐ろしい魔王様が大活躍するリリカルで、なのはな世界じゃ
あるまいな!?

そんなことを考えながら俺、こと【ダン・ゴタンダ】はst魔法学院小等部に入学したのだった。

無論のこと、今いるこの世界が魔王様達が活躍する時代でないことを切に祈りながら……

もちのろん、俺の夢い希望は打ち砕かれたのは言うまでもない、え、どうしてかって？ 新聞に載っていたからだよ。

エース・オブ・エースこと、高町なのはを含めた原作三人娘の写真がな……

………普通が目立たないように過ごしていれば、なにも、何も問題よね！

原作に確実に巻き込まれる呪いも特典でつけた、とかあの女神は戯言を言っていたけど、俺の方から原作キャラと言う存在から、後ろに向かって全力ダッシュすれば問題ないよね！！

「……？ さつきから、変な顔をしてますが、どうかしたんですか？」

「ああ、いや、なんでもない、なんでもないぞアインハルト」

「そうですか」

なんて考えながら、教室で一人で百面相をしていたからだろうか、目の前にいる地球の日本で言う所の幼稚園に入る前からの付き合いの幼馴染と言うか、腐れ縁の「アインハルト・ストラトス」が疑問の色を浮かべた顔で問いかけてくる。

なんか、アインハルトとの付き合いが始まってから思うのは、とつくに詰んでいるという感覚なんだが、気のせいだろうか？ 原作は第二期までしか知らないから、なあ。

まあ、良いか。

なんて考えるのだった。

く vivid って何だろう？く

く 第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ（ドヤア）！！と考
えている内は幸せだったく

小等部に入学してから、三年と言う時間が経過しているんだが、俺の友達と言うか、付き合いのある人間はアインハルトしかないなかったりする。

俺自身の精神年齢が前世と合わせて二十代前半と言えることなどからか、小さい子供達と会話の波長と言うか話題が合わなかったんだよなあ。

その上に転生特典で貰った能力とかの鍛錬もあつたことで、余計に俺の周囲からはアインハルト以外の人間が近付かなくなっていた。

と言うのもあるな、この時期はやっぱ自分とよく遊んだりとか、近い精神の連中とでつるむ事が多いからな。

それも影響したんだろう、何時の間にやら俺はいつも登下校をアインハルトと共に過ごし、学校内でも彼女と一緒にずっと過ごしていた。

「あ、アインハルト、今日も家で晩飯を食っていくか」

「はい、厳さんに呼ばれてますし、ご迷惑じゃなかったら、ですけど……」

「んじゃ、決まりだな」

「はい、今日もお世話になります」

「そこまで気にしなくても良いと思うんだけどな」

その上にだ、どうもアインハルトの両親と家の両親と祖父さんが知っているもの同士のように、彼女の両親は仕事の都合から良く家を空けるために、日本の定食屋ともいべき店をやっている家でアインハルトは晩飯を食っていくんだよな。

まあ、何故かアインハルトも店を手伝う、とか言っただけで看板娘のような感じになっているから、店にとってはありがたいんだけどな。

ただ、あの爺の強さだけは納得がいかない…… どうしてニアスの魔導士を生身で、魔法を使うこともなく一方的に凹れるのだろうか。

相手は犯罪を犯して逃走中の魔導士だったんだが…… 見ているこっちが辛くなるほどの一方的なジェノサイド・ゲームだったのには、かなり驚かされた。

それはそれとして、俺は律儀と言っかなんと言っか、と言った具合のアインハルトには苦笑を禁じえないのだった。

こいつはかなりしっかりとした教育と言っか、そんな感じのことを受けた所為だろうか、いつも丁寧な言葉で喋るし、受けた恩は毎回キツチリと返す奴だ。

「そんな訳にはいきません、ダンのお爺様には大変お世話になってますから」

「爺さんも母さん達も気にするなって言ってるのに、頑固な奴だよね前は」

「頑固で結構ですよ…… それに受けた恩をそのままにしていたら、ダンと同じ所に、あなたの隣に立てないじゃないですか……」

コイツの頑固さは折り紙付だ、なにしろ俺の名前を呼び捨てにしてくれたのも最近だしな。

アインハルトとの馴れ初めだって？ まあ、それは後で語るとするさ、長くなるし何より、詰んでしまった気がする感じが強まるかな。

ただ、小声で言った何かが良く聞き取れなかったんだが、何を言っただろうか？ 聞いてしまったら取り返しのつかないことになりそうでもあるから、気にしないことにしよう。

そんなこんなで、俺の家に着いた後、アインハルトと俺は店にエプロンをつけて出て行くのだった。
さてと、これから戦場だ!!

「ダン! 5番と4番のテーブルにこれ運べ!」

「了解!!」

今は夜の18時である。

立派な夕食時といえる時間帯、それは我が家こと【五反田食堂】も例外ではない。

席は全て一杯に埋まり、カウンター席も同様である。

そんな中で、俺とアインハルトは料理の配膳とメニュー取りに大忙し!といった具合に働いているのだった。

「ご注文を繰り返します、業火野菜炒め定食がお一つ、カレイの煮つけ定食がお一つの以上二つでよろしかったでしょうか?」

『大丈夫よ、今日も精が出るわね、アインハルトちゃん！』

「ありがとうございます」

笑顔はぎこちないながらも注文をキッチリと取るアインハルトの姿は、五反田食堂の一種の名物と言つか、そんな感じにもなっていたりする。

何しろ恐らくだが、アインハルト目当ての客が何人かいるしな、まあ、今はもう一人、俺の妹も店を手伝っているからな、妹目当ての客もいるんだろうさ。

見た目は美少女で尚且つ、クールビューティーと言える外見なんだしな、人気が出ないほうがおかしい。

幼馴染補正を抜いて、しかも小学生だから、将来は無茶苦茶なレベルの美人になるのは間違いないだろうな。

まあ、それもあるが今の俺の体勢を見物したい客も多いけどな、何しろ。

「4番テーブルかばちあの煮つけ定食と焼き魚とフライの盛り合わせ定食に業火野菜炒め定食お待ち……！」

『いや、やっぱりダンくんのこの姿を見ないと、ここで食ってる気にならないな！』

『だよな、両手に一つずつに両肩と両肘にまで皿を乗せて運ぶ姿を見ないと』

「5番テーブルカツどん定食と天井定食にカレイの煮付け定食お待ちー！」

『お、ダンくん精が出るな！』

『相変わらず変わった運び方って言うか、すげえ運び方するよな』

お客さんの一人が言っていた通り、俺の体勢はと言うと両手、両肘、両肩に一つずつのメニューを載せて運んでいるのだよ。

え、どうしてできるのかって？ 慣れたよ、慣れ。

人間、死ぬ気でやりやあ何でもできるもんさあ。

それに身体能力も常人からかけ離れていることだしな、それが原因でもあるだろう。

だけど…… アインハルトの身体能力も同じ様に感じるのは気のせいだろうか？ それに将来、俺が彼女に捕まるイメージも浮かぶのは、気のせいだと思いたいなあ！！

その後は、まあいつも通りに俺とアインハルトは爺さん作の夕食を食って、俺が彼女を家まで送り。

俺は家に帰って寝ていたんだが次の日は管理局の後悔意見陳述……なんだっけ？ 公務員にしては珍しいといつかなんと云うか、と考えたもんだ。

何しろ、後悔、という言葉が入っていたんだし。

配られたプリントは見ていないし、年老いた爺さん教師の言葉だけしか聞いていなかったし、ニュースも見なかったからな、なんかその後起こった事件が原因で、その日から夏休み並みの長期の休みになったというくらいしか聞いていなかったんだけど。

それから数日後、俺は寝惚け眼で自分の部屋のカーテンを開けると、そこには。

「……………なんぞ？ あのでっかい空中戦艦……………」

何か知らんが、でっかい空中戦艦が浮かんでいました！！
周囲には変な光が光ったり消えたりしていることから、管理局の艦でないことは明らか、恐らくはなんかの敵対している勢力のものなんだろうが。

このまま起きていたら、面倒なことになりそうな予感を感じたの

で、俺は！！

「寝よ」

と言ってベッドの中に入るのだった。
だが。

「オラア！！何を寝ていやがるダン！！」

「じ、爺さん！？」

「街中に妙な機械が現れて皆が戦っているってえのに、手前はアイ
ンハルトちゃんを守りにもいかなえってのかい！？」

「いや、は？ そんな機械が街中を襲ってるのかよ？」

「四の五の言ってねえでさっさとあの娘を迎えに行つて、一緒に避
難しろ！！！」

そういつて窓から追い出される俺、っていつか目の前に変な円筒
状の物体がいるんですが！！？

その変な機械、後から知ったら【ガジェット？型】と呼ばれてい

たそれが、レンズの部分から放って来たレーザーを全て俺は。

「のわああああ！！！！？」

全弾を空中で回避した。

「なんだよ、ったく！」

爺さんにわけも分らずに叩き出され、まだ眠い俺、目の前にいるのは良いストレス発散対象、そう俺の脳は認識して一瞬で俺は変な機械に肉薄し。

「詠唱はなんぞ覚えちゃいないが、雷の暴風…… モドキ……！」

イライラと全ての怒りが乗った一撃を放ったんだが…… あ、やっべ、やりすぎた……

何しろ、俺よりも少し上を飛んでいた機械と、その群れを消滅させただけに飽き足らず、でっかい空中戦艦の推進部と思しき部分に

火柱が……

上昇するスピードがちょこつと、心持ち落ちたような気配を感じた後、冷静となった俺が取った行動は。

「うん、アインハルトと一緒に避難するか」

だった。

無論のこと、俺は自分自身の魔力を隠蔽して、アインハルトを探していたけどな。

その後の顛末を語ると、簡単だ。

家でフルフルと恐怖で震えていたアインハルトを保護して、一緒に避難所に駆け込んで保護してもらおうとした時に、襲い掛かってきた機械数体をなんでもありの卑怯な戦法で撃退、なんかアインハルトに変な目で見られつつも、避難所にたどり着いて保護してもらった。

その後は、機動六課、だったけ？ の活躍で空中戦艦は撃沈されて終了！

といった具合だったようだ。

ただし、どうも、空中戦艦に1撃を与えた魔導士のことが気になったらしく、暫くの間、ピンクのポニーテールの巨乳なバトルジャ

ンキーの女性や、赤い髪を持った、かなり気の強いロリッ娘、などが俺の家がある周囲をうろついていたんだが、ロリッ娘と知り合った以外は何もないと言いたい。

まあ、鉄槌の騎士ヴィータと烈火の将シグナムなんだが…… 気づかれてないよな？ 気づかれてないよね？

なんて考えて、俺はベッドの中でブルブルと震える日々を過ごしたのだ。

第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ(ドヤア)！！と考えている内は幸

このSSのダンは基本的にIS本編のダンと見た目は一緒です。

後は基本的なスペックも同等ですが、年齢などによる弱体化もありますが、あまり本人は気にしていなかったり……

ただ、今は魔王様の砲撃怖い、と言っのが心境を埋め尽くしております。

後は、舞台となっている第四期の原作知識が無い、というのがありませんね。

なのでアインハルトが主人公であるのに、彼女と幼馴染と言っ関係になっちゃった彼、どう転んでいくのかは、作者にも分かりません！

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチ

何か変な状態なんだろうか、数時間程度で、一気に執筆できた……

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチ

あの变な空中戦艦浮上事件から4年の歳月が流れ、俺達はs t h
ルデ魔法学園中等部に進学していた。

え、俺とアインハルトの関係って？ いつもどおりさ、ただ……
俺が好みのタイプの女性とかをグフフとばかりに見ていたら、機
嫌が急降下&制裁を加え始めてきたのが最近の悩みだ。

確かにアインハルトは将来有望だ、間違いなく将来は巨とはいか
ずとも美といえるくらいの乳をもっているのは確実！！

だけど如何せん、俺とアイツはちうがくせい、そう、まだアイン
ハルトのスタイルは微な状況なんだよな。

だからアインハルトをそういう目じゃ見れないし、何よりも、あ
の時の空中戦艦の事件の時に涙を流して震えていた彼女の姿を見れ
ば、まあ、将来的にもあんまりエロい目じゃ見れないなあ。

ぬっ！？ あのおねいさん戦闘力Gクラスだと！？ ええい、も
う少し俺が歳を重ねていれイデデエ！！！！

「ダン、何を見ているのですか？」

「い、イエ、何も……」

一体何時、彼女は俺の視線が他の女性へと向けられて、しかもエロい物を含んだものに変わったことを知ったのだろうか。

金髪で黒い何処かの制服を着たおねいさんに声を掛けるべきかどうか迷った瞬間に、俺の脇腹に走る鋭い痛み。

見れば、アインハルトが目が全く笑っていない微笑で俺を見ていた。

……　なんか危険と言うか、そんなものをそこはかたく感じるのは、気のせいだろうか？

まあ、それはそれとして。

「と、所でだ、アインハルト」

「何でしょうか？」

「今日はどうするんだ？」

「そう、ですね……　今日は、その、遠慮させてもらえますか？」

「分った、爺さん達には伝えておくな」

「はい、お願いします、あと……　明日はお邪魔させてもらいますから、そう、伝えてもらえますか？」

最近、というか。

去年辺りからアインハルトは、家で晩飯を食う回数が減ったのだ。

理由は分らないが何かを彼女が隠している気配がある。

だけど、彼女が言わないから俺は何も聞かない事になっているが、聞いた方が良さのだろうか。

なんて考えていたら、彼女の家に着いた。

「では、ダン、また明日」

「おう、後、アインハルト」

「……？　なんででしょう」

「夜に出かけることとかあったら、気をつけるよ、最近連続傷害事件なんて、物騒なこともあるみたいだし」

「……………はい」

被害届こそ出ていないし、噂程度でしか聞いた事ないけど、最近、物騒なことが相次いでいるからな。

その上での忠告と言うか、そんな感じのことだったんだけど、一瞬彼女の顔が強張ったのはどういうことだろうか？

まあ、アインハルトが例のあれの加害者って言うわけじゃないだ

ろっし、俺の気の所為かね。

一瞬彼女の顔からは、隠し事がばれそうになった時のアインハルトの様子と同じものが表情に浮かんだんだが。

まあ、良いか。

後に、俺はこの時の判断を後悔することになる。

原作に関わることになっちまった！って意味で。

）vivividって何だろう？）

）第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチはノーサンキュー！）

いつもと同じ帰り道、私はたった一人の友達であり、幼馴染、そして一番大切な人のダンと一緒に帰っていた。

年月が経つほどに分ったのが、ダンがとっても【エッチ】だと言うことです。

思うように成長してくれない私の体、スタイルもまだまだで、よく彼のお店に来る様々な女性達のスタイルとは私のスタイルは比べられない。

うう…… 武装形態と読んでいる私の姿は、あんなにスタイルが良いのにどうして…… なんて考えもする。

だけど、いつの間にか彼は管理局の執務官の制服を着た、とても綺麗な金色の髪を持った非常にスタイルの良い女性を、いやらしい目つきで見ている。

「むっ」

それと同時に沸き起こる私の胸の内の感情。
私はその感情に心当たりはついている。

嫉妬、それだ。

私が隣にいるのに、どうして彼はすぐに他の女性に目移りするのだろうか。

私だけを見て欲しいのに。

この気持ちに気がついたのは、4年前の事件の時に、彼に助けてもらった時だった。

その前から似た気持ちはあった、いつも一緒に過ごしていた彼、こんな暗い性格で虹彩異色という瞳まで持った私、同じくらいの年の子達からは格好のイジメと言うか、そんな対象になっていたときに彼だけが私の傍にいてくれた。

私は特殊な生まれで、先祖の記憶が時々夜に蘇ったりして、眠れない時が合ったりした。

その時に彼は決まって私に連絡をしてきてくれて、泣いている私を安心させてくれた。

心の奥底に抱いていた感情が、ただの幼馴染から大切な男の子に変わるのに時間は掛からなかった。

でも、あの事件の時に私は無力さも味わってしまっ

彼が助けに来てくれなかったら、私は、あの日、命はなかっただろうから。

外の様子がおかしくて疑問に思っただけに出た私は、燃えている町や破壊されている建物を見て、恐怖という感情に支配されてしまったのだ。

そして、私は変な機械に【ガジェット】と呼ばれている機械によって、命を奪われそうになった瞬間。

『俺の大事な幼馴染に手を出すんじゃない！！』

そういつて私を颯爽と助けてくれた彼、その時に、私は彼の事が本当に好きになってしまったんだろう。

それから数体の機械に襲われたのに、彼が全部蹴散らして（アインハルトの乙女補正が入っておりますので、ダンが横島並みの卑怯な手段を講じてガジェットを撃墜した瞬間の映像は削除されています）くれて、避難所まで無事にたどり着けたのだから。

それから私は、それまであまり真剣に修め様としなかった覇王の武術を修める事を決意した。

彼の家で、夕食をあまり一緒に食べられなくなったりしたけれど、でも、彼の隣にいたいという思いで私は今も耐える。

私は彼を守れて、彼も私を守ってくれるって言う対等な立場に、私は居たいのだから。

ただ、貴方は…… 夜にストリートファイトを行って、人に迷惑を掛ける私を、どう思いますか？
そう思ってしまった。

そんでもって夜になり。
俺はいつものように店に出るのだった。

「こんばんは、ダンくん」

「お、ギンガさんじゃん、らっしやい！」

とつくに晩飯時は終わって、客が引いた時間帯を見計らったようにやってきたのは「ギンガ・ナカジマ」さんというとても綺麗で、素晴らしいスタイルを持つおねいさんである！！

相変わらず素晴らしい乳でっす！！ぐへへへええ！！

と言いたくなる気持ちと緩みそうになる表情を俺は、気合で抑えながら彼女の元に注文をとりに行く。

いつもは妹さんのスバルさんを含めた他の妹さんたち、親父さんであるゲンヤさん達一緒に居るんだけど、たまにギンガさんが一人でここに来るんだよね。

ただ、彼女達が来るときは、偶然か決まってアインハルトがいない日なのが気になる……。まるで、何かの修正を受けている感じのような……

き、気のせいだよね？ 彼女達も原作キャラだ！とかなんて……

「注文はなんつすか？」

「それじゃあ、いつもの業火野菜炒め、ナカジマ盛りでお願いできるかしら？」

「了解っす、ナカジマ盛りっすね」

ギンガさんの注文を確認後、俺は爺さんに注文を伝えるんだけど、ここでナカジマ盛りについて説明しておこうと思う。

ギンガさんを含めたナカジマのお嬢さんたちは健啖家という言葉が、裸足で逃げ出すくらいに食うんだよ。

最初に見たときは流石に引いた。

何しろ業火野菜炒めを10人前を普通に平らげた上に、スイーツを食べに行こうとか普通に会話していたんだから。

その時のゲンヤさんの表情は形容しがたい、複雑なものだったんだけど、そりゃそうだろう。

自分の娘が、外食して普通にとんでもない量食べているんだしな。

それから、ナカジマの皆さんが家を良く利用してくれるご贔屓さんになってくれたので、爺さんがナカジマ盛りなるものを作ったのだ。

量が単純に10人前の業火野菜炒めにカレイの煮付け、かぼちゃの煮つけの各種定食なんだが、爺さんもここで10人前の量を盛り付けることが出来る皿を見つけてきたんだか……

そんなこんなで、表のメニューには載っていない裏の注文でもあるナカジマ盛り、なんて物ができたのだ。

お客さんがギンガさん以外は居ない状況で、彼女がちよいちよいと手招きしているので近寄ると、彼女の横の椅子をポンポンと叩いたので隣に座る。

「うーん、やっぱり大きくなったね」

「そうっすかね？」

「うん、つい2、3年くらいまでは膝の上に乗せれるくらいだったのに、今は私に背が追い付きそうじゃない」

「今でも大歓迎です」

「クスクスッ、コラ、この甘えん坊さん」

うん、まあ、なんだ？ 照れる。

彼女の顔は弟の成長を喜ぶ姉、と言った様子で、俺の頭をかいぐりかいぐりと撫でてくるんだから。

爺さんやお袋に親父達は微笑ましい物を見る感じで、見守るばかりで何もしてくれない。

照れを誤魔化す代わりに俺は、言っているんだけど、彼女は俺の額にこつんと拳を当てて、くすくす笑っているのだった。

「ダン、出来たぞ、ギンガの嬢ちゃんの所に持って行ってやれ！」

「あいよー！」

ニヤニヤとした笑みを浮かべる爺さんが、常識ではまず考えられない量が盛られた野菜炒めを完成させる。

それから俺は、まだ頭を撫でてくるギンガさんから逃れてから、危なげなく皿を持つが、ずっしりとした重さに見ただけで腹が満たされるこの感覚、何時になっても慣れない。

だけど、ゲンヤさんはいつもこれを味わっているんだよなあ。なんて考えるけど、なれたんだろうなあ、とも同時に考える。

「業火野菜炒め、ナカジマ盛りお待ちっす!!」

「ありがとう」

それから俺はギンガさんにそれを届け、カウンター内に戻る。

「オイ、ダン」

「なに？」

「お前もギンガの嬢ちゃんと一緒に食っちゃいな、ついでに用意した」

「お、ありがとう」

戻ってきた俺をいきなり爺さんが声を掛けてくるので、俺は疑問顔で爺さんを見上げる。

爺さんが、俺に定食に使う盆を渡してきたから、受け取ると視線を感じる。

俺はそっちの方をチラリ、と見れば。

笑顔のギンガさんが手招きしているのだった。

そして、爺さんを見れば、ニヤニヤとしているので、恐らくは【可愛がられながら食って来い】とでも言いたいのだろう。

え、俺の選択って？ 決まってるじゃないか！！

「ギンガさん俺も晩飯なんですけど、一緒に食って良いですか!？」

美人のおねいさんに可愛がってもらえるならば、どんな食事でもパラダイスだ！！

こういう時はまだ押さないことに感謝できる！！おねいさんにセクハラまがいのことをして、笑って許してくれるんだしグフツツ！

それから俺は、ギンガさんと一緒に楽しい食事をした後、鍛錬と
いうか能力を使いこなす為の訓練を行う。

その後で、風呂に入って部屋に戻ったときに、俺は自分が持つて
いる携帯端末にアインハルトからの着信があったことに気が付く。

だけど、俺が何回か掛け直しても繋がらないこと、それに俺は焦
れ始めたのだが。

まさか、アインハルトが夜にあんなことをしているなんて、この
時の俺は知る由もなかった。

アインハルトがやっていたことは？ 間違いなく俺と爺さん
が説教をする内容だったのは、間違いのないな。
うん。

心配かけさせやがってあのバカ……！

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチ

次回辺りで、vivid本編に入りますが、ヴィヴィオの出番はもうちょい先ですね。

ただ、ダンはとっくに逃げられない、と言うことに気が付いていない。

と言うことには、今回の話で、一目瞭然ですね。

何しろギンガに弟分として、愛でられている時点でダメだし、ナカジマ一家と知り合いな時点でもダメと言うことに、彼は永遠に気が付かないでしょう。

第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを……

強くなりたくて挑む

物語が動き出す数週間ほど前のステヒルデ魔法学院にて、一つの邂逅があつた。

初等部の少女達三人が本を持って歩いているのだが、その歩みは危なっかしいと言えるものだった。

時折ではあるが本の重みに耐えかねているのか、ふらつきながらバランスを必死で取っていた。

仲も良いのか、少女達は談笑しながら歩いていくのだが、階段を上り始めて半分ほど行った時にそれは起こった。

「っ！あー!!」

「きっ!?!」

「ヴィヴィオ!!コロナ!!」

上っていた少女達のうち、二人、ヴィヴィオとコロナ、と呼ばれた少女達が階段を同時に踏み外して落下していくのだ。

少女達が踏み外したことに顔を真っ青にさせて、絶望、という感情に彩られた声を上げる額の上にリボンをしている少女。

まだ2人はこれから自分の身に起こることを自覚していないのか、
呆然とした表情になっている。

自分の友人に起こる悲劇を見たくない、といった様子でリボンをつけた少女は目をきつく閉じ、落ちていく少女達も自分たちの身に起こることの覚悟を決めた瞬間。

「まったく、あつぶねえな」

「へ、へう？」

「え、えあう？」

なんとという気の抜けたような声が聞こえたと同時に、少女達は疑問と言う感情が先に浮かび上がる。

階段の上に居る少女は、自分の友人に破滅を齎す音が聞こえないこと、落ちていく少女達は自分の体が、暖かくて頼もしささえ感じる何かによって受け止められていることだった。

ぶつちやけ、少女達を受け止めたのは、ダンである。

それが数週間前、ダンが中等部に上がる前に起こった出来事である。

偶然図書館（の新任の司書のおねいさん目当てと言う用事）に用

事があつた彼が、受け止めたのだが。

これが後にどう影響を及ぼすのか、能力を自分で大幅に制限し、
答えを与える力も無いこの時の彼には、分からぬことでもあつた。

く vivid って何だろう？く

く 第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強く
なりたくて挑むんなら家の爺がちょうど良かったのにねえ……く

今は夜中の2時近く、俺は未だに連絡が取れないインハルトへと携帯端末を操作していた。

店を閉めた後くらいから、爺さんや親父達が夜の町へと出発、アインハルトの捜索を行ってくれている。

既に家には向かったらしく、彼女が家にいないことは確認済みでもあった。

「くそっ…… やっぱ、あの時に問い詰めておくべきだったってことかよ……」

夜に女の子から連絡があつて、その後に連絡がつかないこと、俺の頭に最悪に近い考えが浮かぶ。

それと同時に浮かんではいるのは、昼間の彼女の様子、強ばった顔に体、隠している何かが、俺に迷惑が掛かりそうだとか、勝手に考えて隠していることがバレそうになった時に決まって浮かべる彼女の顔。

さっき爺さんと親父に連絡したら、まだ見つかっていないとか言っていたが、爺さんの方ではなんか、何人かのチンピラと思われる男共の悲鳴が上がっていたんだが、まさか爺さんに喧嘩を売ったバカがいたのか……？

きちんと極楽にいけると、良いよなあ……（注：死んでません。

それから再び彼女の端末に掛けた瞬間、ついにそれが開かれる。

「アインハルト!!?」

『ご、ゴメンねダンくん』

「って、は？ す、スバル、さん？」

俺は珍しいというか、この世界に来てから始めて間抜け面をさらしていただろう。

何しろ、俺がアインハルトに掛けた携帯端末に出てきたのは、ギンガさんの妹の一人であるスバルさんだったんだし。

正直に言って驚愕というかと言うか、なんと言うかである。

幼馴染の見慣れた顔が出てくるかと思ったら、常連さんの顔だったんだし。

『うーん、この際だからダンくんにも説明しておくね』

「う、ういっす……」

それから聞かされた言葉の数々を聞いて、俺は脱力と同時に怒りが浮かび上がってくる。

あんの阿呆！小さい頃からどっかがズレた奴だとは思っていたが、まさかあんなこと、ストリートファイトをして強さを試してたなんてよ。

しかも連絡がつかなかった今日は管理局員に喧嘩を売って、しかも、やられて夜中の道端で気絶していたなんてな。
ったく！

その後は爺さんや親父達にも同じ様に連絡、事情を伝えた2人も怒ったような様子を見せた後、明日にまずは俺が迎えに行くことで決着が付いた。

覚悟してるよ、アインハルト……！

心配、心配掛けさせやがって！

それから俺は、スバルさんが指定してきた時間、午前8時にナカジマ家の居間でアインハルトが下りてくるのを待っていた。

ゴゴゴゴ……！

と怒りを漲らせている俺、無論のこと、我が家では爺さんに親父にお袋たちも同じ様な様子で待ち構えているのは言うまでもない。

『あ、あの、やっぱり、先に入ってくれませんか？』

『ダメだ、あんなにお前さんの端末に連絡を掛けた上に、あん時の、ダンのあの顔のことも見てるんだ、お前がまずは顔を見せて安心させてやれ』

『まずは、謝って、それから怒られ様ね、ダンくんだって、貴女にイジワルしたくて怒る訳じゃないんだから』

『それに大事な幼馴染なんでしょ？ まずは貴女が彼に説明しないといけないでしょうが』

『うう……』

なんてやり取りが聞こえてくる。

一人は聞き覚えの無い声だったけど、後の二人は聞き覚えがあるというか常連さんだし覚えがある、スバルさんとノーヴェさんだ。

恐らくは聞き覚えの無い声は、彼女達が言っていたティアさんって人だろう。

それから、戸惑いなのか、ゆっくりと扉が開いていく。
そこに立っていたのは、私服のワンピース（以前出掛けた時に俺
が選んだ）を着ている彼女の姿、彼女の姿は俺に全てが知られたと
言うことによるものか、小刻みに震えていた。

「アインハルト」

「……はい……」

「正座」

「は、はい……」

ソファに胡坐をかいて座っていた俺の言葉に、素直にアインハル
トは従って正座（因みに俺と爺さんが畳の上での座り方として教え
た）をする。

「だ、ダン……」

「なんだ？」

「い、コメンなさい……」

土下座、とも言わべき様子で謝ってくる彼女の姿を見れば、怒る気が失せてくるのはなぜだろう。

だけど、心を鬼にして！！

「ああ、だけどまずはだ、どうして、あんなことをしていたんだ？」

「……」

「答えられない、か？」

俺の問い掛けに返って来た彼女の返答は沈黙だった。

ただし、黙っていることに彼女自身が苦しさを我慢しているような表情をしているからか、俺に関わることでもあるのだろうか？

この阿呆…… など考えながら更に彼女に問いかければ、彼女は小さくだけど確かに、躊躇いという感情を浮かべながら頷いていた。

「答えられないなら構わない、俺もお前が言いたくないことを無理に突っ込まないしな」

「……」

「だけど……」

「…… だけど？」

「この……！バカチンがあ……！」

「いたっ……！」

俺はアインハルトの頭に拳骨をかましていた。
ゴッソ……と派手な音を立てて彼女の頭に炸裂、彼女も苦痛で表情が歪むのだが、俺は気にせず更に言葉を続ける。

「つたく、ストリートファイトで多数の人間に喧嘩を売ってしかも昨日はやられた上に夜の路上で気絶してただあ……！」

「うっ……！！！」

「お前なあ……！見た目は今でも凄げえ良いんだし美人になるのが分る人間なんだよ！もしも変な奴に絡まれたらどうするつもりだったんだ……！」

「うっへっ？」

「言いたいことはまだあるけどな、俺の家で爺さんやお袋たちが待っているからな、俺からはこれまでだけ…… 一つだけ言いたい

し、言っておく」

プクツ、と彼女の頭に漫画調のたんこぶが浮かび上がり、俺はアインハルトの両肩を掴んで、揺さぶって言っていた。

感情に任せて言っていた言葉の中に、何かまずい言葉があった気がするんだが、気のせいとしておこう。

最後に俺がわざと切った所の言葉に、疑問の色を浮かべる彼女。

俺は一番言いたかった言葉を、彼女にぶつけるのだった。

「心配、掛けさせるんじゃないよ！」

「だ、ダン……？」

「大事な、大事な幼馴染なんだよ！お前は……！」

「——っ……?!?!?」

あれ、何か言葉の選択を間違えたのだろうか？

アインハルトがズギュウウウン！とか効果音が付きそうな位に、顔を真っ赤にしているのが気に掛かる。

それに扉の向こう側のスバルさんたちの気配が、ニヤニヤと言う

か、変なものに変わったから。

俺の言葉の選択が間違った可能性が高いなああああ！！！！

なんて考えながら、俺はアインハルトに付き添って警防署に行く
と、そこでお袋と合流。

それから全ての手続きが終了した後で、アインハルトはお袋から
【お尻ペンペン！！】のお仕置きをされた後、爺に親父とお袋の3
人からも説教を受けたのだった。

何度か助けを求めるような視線がアインハルトから向けられてき
たが、俺はそれを全て無視して、スバルさんたちに迷惑料としての
俺特製業火野菜炒めなどを大量に振舞うのだった。

はあ、なんか、嫌な予感がこれからするよなあ。
なんて考えつつでもあったけどな。

第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強くなりたくて挑む

後々で後輩の女の子達とのフラグが生きてくると言う、畏がww

第4話 幼馴染の成長を喜んでいたら、それはフラグだったでござる！

アインハルトのやんちゃ発覚事件から数日、いつもの日常に戻った俺とアインハルトだが、強くなることに関しての鍛錬と言うか、そんなのは爺さんと俺を中心として行うことにした。

今まで制限していた能力群のリミッターというか、使用制限を解除して鍛錬の為のメニューを作ったんだよな。

魔力だけは未だに制限を掛けてギリギリBに届きそうなくランクとしていたりするが…… これもバレたらやばいかなあ？

その際に何故か俺も一緒に鍛錬に参加することになったのは、疑問を感じざるをえない。

あんなに嫌がっていたのに、どうして付き合っているのかって？
それはな。

『ダン…… 私と一緒にトレーニングをするのは、いや、なんですか？』

といって前世で見たことのある某チワワの如きウルウル目で、俺をジーと見つめて来るんだよ！

あんな目で見られたらたまらないぜ！？ 俺が気が付いたらいつの間にか頭を縦に振っていたんだからな。

まあ、純粋な組み手に走り込みとかの付き合いをやっているんだが、やっぱり強くなってるっつーか、何時の間にこんなに強くなってたんだよ、こいつ。

「あの4年前から思っていますが、ダンはどうしてそんなに強いんですか？」

「俺の場合はあの爺だな」

「え、お爺様ですか？」

そう、俺が4年魔のあの日に戦えた上に爺が俺を部屋から叩き出したのも、生まれた時から俺がある意味で才能の塊だということを知って、小さい頃からずっと鍛えられたからだよ。

向かってくるアインハルトの正拳突きを俺は右手でいなす運動を利用して、左肘を彼女に打ち込む。

図らずもカウンターになった形だが、彼女は声をあげることもなくガードしようとする。

「ああ、俺は才能の塊だから、それを遊ばせるつもりもないし、五反田食堂を継ぐ条件の一つが爺を倒すことでもあるって言われてな」

「才能の塊という言葉には頷けますが、食堂を継ぐ条件がお爺様を倒すと言うのは、ちょっと頷けないものが……」

更に打ち込まれてくるアインハルトの拳、蹴り、これらを俺は全て回避、受け流していき無効化していく。

彼女の表情に一瞬微妙なものが浮かぶが、それはしょうがない。

それから数十分、俺達は組み手を行った後、登校する時間帯に近づいてきた所で止める。

「それじゃあアインハルト、また後でな」

「はい、後、ダン、その…… 今日放課後、付き合っ
て欲しい用事があるんですけど……」

「ん、買い物か？ 了解だ」

「え、えと、は、はい……」

珍しいことにアインハルトの方から、放課後のお誘いがあった。
こいつは出不精の性質で俺が誘わないと、休日俺の家でバイト
まがいの手伝いをしているしかないのだよ。

年頃の娘さんがこんな調子ではいけない！と思って、よく街に買

い物とか遊びに誘っているんだけど、こうして彼女の方から誘いがあつたのは初めてだ！

色々と成長した娘を見る感覚になっている俺を、変な目でアインハルトが見ていたんだが、まあ気にしないことにしておきましょう。

）vivividって何だろう？）

）第4話 幼馴染の成長を喜んでいたら、それはフラグだったでござるー！）

そして時間が過ぎていき遂に放課後となる。

俺は隣の席で帰り支度をしているアインハルトに声を掛けた。

「そんじゃ、どこに行く？」

「はい、実は行く所は、もう決まってるんです」

「珍しさもここまで来ればすごい事になるな」

今日のアインハルトは、本当にどうしたんだろうか？

いつもならば俺が手を握って引つ張る形で彼女から、どこに行きたい、とか、そういうリクエストはなかったんだけどなあ。

だけど俺の言葉を聞いたアインハルトは途端に機嫌が急降下して、唇の先を尖らせている。

あ、拗ねた。

「……むう、私が行き先を決めていたらおかしいですか？」

「いや、そんなわけないぞ、ただ無茶苦茶珍しいと思ってな」

「そう、でしょうか？」

「お前、自覚なかったのか？」

唇を尖らせて、頬も少しだけ膨らませてからそういつて来るインハルト。

…… ちよつとだけ可愛いと思ったのは秘密だ！

俺の言葉に小首を傾げるインハルトって、コイツまさか、いつも自分が行き先を決めていなかったこととか、出不精のこととかに自覚がないのかよ。

なんて考えていたんだが、次の瞬間に俺の頭の中は真っ白になってしまう。

「自覚は少しありました…… でも、貴方が私の手を握って楽しそうに引っ張ってくれる姿を見ると、私は十分すぎるくらいに楽しくて、幸せな気持ちを感じるんです」

「はへ？」

「だから、私は……」

「お、おうあう……」

僅かの上気した頬と、本当にそう思っていることを思わせてくれる表情。

はつきり言つて、いつものクールビューティーと言えるアインハルトはどこに！？　と言いたくなってしまう。

アインハルトは自分の胸に両手を当てて、本当に幸せそうな微笑と共に俺にそう言っていた。

コイツって、たまにだけ本当に聞いている方が恥ずかしくなることを言うことがあるんだよなあ。

そんな感じの事を唐突に言い出すから、肉体年齢では同じ年で精神年齢では上のはずなのに、俺が彼女に翻弄されることがしばしばある。

「クスッ、これから先は、まだ、ヒ・ミ・ツ、ですよ」

人差し指を自分の唇に当てて、アインハルトはそういつていた。小悪魔っ娘の如き笑みを浮かべて言っているアインハルト、そんな見るもの全てを赤面させてしまうそうなくらいに可愛い彼女を俺は自分の頬が赤くならないように必死でコントロールしていたんだが、アインハルトは俺の唇に自分の人差し指をくっつけて来ていた。

こいつって、こんな奴だったのか？　というか、あの時、スバルさん家で言った言葉の後から、こんな様子が増えた気がする。

「あ、ああ……　そ、そそ、その日が来るのを、たのしみにしてる」

「はい、楽しみにしてください」

思わず一歩引いた俺だが、アインハルトはそんな俺の様子も微笑ましいのか、ニコニコと微笑みながらそういつていた。

（いつか貴方に……　私の事を一番大切な女の子、と言わせて見せますから、だから、覚悟、してくださいね）

そんなことを考えているアインハルトの事を知らないままだな。

ダンとアインハルトが学校を出た後、ノーヴェはとあるオープンテラスを持つカフェにて、彼らを待っていた。

ただし、自分が呼んだ人間以外の者達もいる状態ではあったのだが。

「って、どうしてお前らがいるんだよ！？ 呼んだのはチンク姉だけだぞ！！」

それから返ってくる彼女への謝罪と思われる一つの言葉と、別にこの場にいることを気にしていなさそうな言葉の数々、ノーヴェは思わず頭を押さえながら一度うめく。

そして、その後に自然と思い出していた、ダンが近くにいない時に彼女と交わした会話を。

『かつて…… 霸王イングヴァルトは、聖王女オリヴィエに勝つことが出来ず…… 彼は彼女を救えなかった……』

『だから時代を超えて、再戦って訳なのか？』

警防署の中でダンが母親のレンと共に手続きに出ている時間帯に出来た会話の切っ掛け、意外な事に話しかけてきたのは彼女の方からだった。

そのことに少しだけ驚いた様子を見せながらも、ノーヴェは応じているのだが、少しだけ彼女の様子が気がかりでもあった。

『…… 覇王の血はやはり時代と共に薄れていきますが、たまに私のように身体資質と記憶を受け継ぐ者が現れます』

『それで?』

『彼は、彼女に一度も勝利することがなかった記憶が、私の中に違ったイメージで流れ込んでくることあるんです』

『…… どんなイメージだ?』

自分の言葉が聞こえていないのか、それともこれから返事が返ってくるのかが分らないが、アインハルトは静かに言葉を紡いでいていた。

そんな彼女の様子にノーヴェは疑問の色を浮かべるものの、すぐに彼女に問いかける。

それと同時に彼女は、一筋の雫を一度閉じられた目から流す。
これを見たノーヴェが驚く間もなく、彼女は大粒の涙を瞳に浮かべながら、ノーヴェへと向き直る。

『私が！私が弱かったから！彼を助けることが出来ずに、弱いわたしを守って、私の目の前で……！かれが！私にとって一番大切な彼が！命を……っ！』

『……………』

今は自分の自宅ともなっている家で見た彼らの様子、ノーヴェはダンとアインハルトの二人がお互いに、大切に想いあっている関係だとは分かっていた。

どう答えて良いのかが分らない。

それがノーヴェの率直な感想だったろう、まだ彼女自身が本気で異性に恋心を抱いたことがないのだから無理もないといえる。

彼女が言ってきたイメージというのが、一番大事に想い、異性として思いを寄せている自分の想い人が目の前で【殺される】姿を、夢で見せられるというのだから。

大粒の涙を流して、しゃくりあげている彼女を見ていたノーヴェだが、一度首を横に振ると口を開いた。

『そのことも含めて、あいつと話してみたら良いんじゃないか？』

『ふえ？』

『ダンはさ、ギンガやスバルと一緒に五反田食堂に行ったときに話す程度だけどさ、お前がそれを話してくれるのを待っているかもしれないぞ?』

『……』

『今朝の事を見ても、アイツがお前の事をかなりしっかりと見ているのは間違いない、だから、さ、お前も』

『…………… 彼には、霸王の記憶のことは話していますが、このイメージだけは言ってます……』

霸王の記憶のことを、既に言っているといったアインハルトにも驚いた。

だが、ダンが死ぬ夢を話していない、という事を聞いたノーヴェは当然だとも考える。

自分にももしも彼女のような想いを寄せる異性が現れたとして、その彼に言えるだろうか。

彼が死ぬという夢を度々見ると言うことを。

自分であれば言えない。

『でもさ、それでも、ダンにそれを話してみろよ、霸王の記憶のこととは言っただろ?』

『はい』

『じゃあさ、一緒に考えてみたらどうだ？　ダンは間違いなくお前のことを思っているからさ』

『……………』

最後の言葉に小さく、自信がなさそうに頷いた彼女を見た。
だけど、ノーヴェは思う、アインハルトを本気で心配していた少年と、アインハルトという少女の思いが通じること。

そして、それからダンとは直面する。

「あの時助けてくれたのは貴方で、しかも先輩だったんですね！」
「あの時はコロナとヴィヴィオを助けてくれてありがとうございませす……」

「ダン先輩！なのはママと一緒にお礼に窺います！だから、今度は自己紹介、してくれますか？」

自分がかつて助けていた少女と。

「ダン」

「は、はい……」

「年下趣味だったんですか？」

「それひつでえ誤解だからアインハルト……！」

という危機に。

第5話 え、ギンガさんに光源氏計画疑惑だって？ あはははっ！！まっさか

座り直してアインハルトとのやり取りも思い出し終わった彼女を見計らっていたのか、スバルとティアナが座っているテーブルに眼帯をした少女が座る。

「チンク姉、どうかしたのか？」

「ノーヴェ、来るといつていたのは、彼女、アインハルトだけではないのか？」

「ああ、そのこと、か」

チンクと呼ばれた少女は柔らかくも鋭い、という声でノーヴェに向かつて問いかける。

彼女達が合流する前に、言われていたのは紹介したい子達がいるという風に聞いていたからだ。

だからこそ、彼女は聞いて置く事にしたのだ、自分達がある少女に彼らを紹介しようと考えている者達が、自分たちのかけがいのない友人であり親友と言える少女、彼女を傷つけてしまう可能性があるのか否か。

という事を、

「チンクの警戒って言うか、そういうのも尤もだけど心配要らないよ」

「ん？ どうしてだ？ スバル」

「だって、もう1人の子は五反田食堂のダンくんだよ」

「ああ、ギンガによく懐いていた、あの不思議な少年か」

「そうそう、ギン姉お気に入りの子だよ」

「……………（いや、ギンガのあの目は気に入っているっていうよりも…………… 獲物を狙う捕食者の目、つつーか…………… ギンガの奴…………… まさか、なあ？）」

スバルの五反田食堂のダンという言葉に、一気に警戒を緩めるチンク。

ぶっちゃけると、彼女を含めたナカジマ一家は約一名を除いて、月に一度通うという常連なのだから、信頼と信用といった関係は既に構築されていたのだ。

チンクとスバルのやり取りを聞いていたノーヴェは内心で、少し、以前にギンガが彼を見ている視線の事を思い出していた。

あれはなんだったんだろうか、そう思いながら彼女は少し前に見たドラマを思い出す。

「だったならば、今日の予定が合えば、ギンガも誘えばよかっただろうが……」

「うーん、ギン姉って忙しいからね、何しろアインハルトの事があった日の夜も管理局に缶詰だったみたいだし」

「……………（いや、まて、その日はギンガの仕事は9時くらいで終わってたはず…………… ダンの奴からアインハルトのことがあった日も来てたって聞いたんだが、まさかシヨタコンの上に、自分好みになよう…………… いやいやいやいやいや…………… 育て上げて、一番美味しくなったときにペロリ…………… なんて考えているんじゃない!?）」

かなり想像力が豊かと言うか、なんと言うかである。

一人で顔を赤くしたり青くしたりしている彼女を、ティアナは疑問と言うか怪訝に見ていて、他の人間達は面白いものを見る目で見ているのだった。

但し、ここで彼女の疑問にちょっとだけ答えれば…………… 仕事だと嘘をついてまで一人で五反田食堂に行つて、ゆっくりじっくりと時間を掛けて、ダンと一緒に食事をしていた。
とだけと言えるであろう。

「vivividって何だろう？」
「第5話 え、ギンガさんに光源氏計画疑惑だっ
て？ あはははっ
！！まさかぁ！！」

それから会話を続けようとしたときに、ティアナが
少しだけ真剣な表情になっていた。

「ちょっと、三人とも良いかしら？」

「ん、どうしたの、ティアナ？」

「どうした」

「なんだよ」

周囲の目などを一瞬気にして小声にするように、とのジェスチャーをしてきた彼女に従って、表情を引き締める三人を見たティアナは言葉を続ける。

「そのダンくんって子の事だけど……調べてみようと思うの」

「どういうことだ？ 彼は何の力もない、我々が守るべき民間人だ、あまりそついうのは感心できないことだが？」

「…… 本当に何の力も無い民間人ならね……」

「何か、気になることがあったの？」

言い放ったティアナの言葉に嫌悪感を表したのは、チンクであった。

チンクやノーヴェを含めた少女達は過去に、ある事件【JS】事件とも呼ばれるものを起こしているのだが、それは割愛させていた

だく。

その事件の後に管理局にて働いている彼女としては、傷害事件を起こしていたアインハルトはともかくとして、店に行けば自分達を暖かくもてなしてくれる。

そんな優しい少年の身辺を探ると言うことについて、良い感情を持てなくなっているのだった。

だが、チンクの威圧感すら籠った言葉をティアナは軽く流すと、どこか奥歯に物が挟まった物言いをして、それにスバルが純粋な疑問を投げかけるのだった。

「アインハルトから聞いたんだけど…… 4年前の事件、あの時にダンくんってガジェットを魔法も使わずに丸腰の、その、生身で結構な数を撃墜していたらしいの」

「なっ、に!？」

「う、うそ……」

「マジかよ……」

彼女の言う事件、第1話でダンが巻き込まれて、アインハルトを庇いながら撃墜していた存在の名前は【ガジェット・ドローン?型】と呼ばれる戦闘機械である。

無論のこと、魔法も使えない人間や、丸腰の人間どころか当時の

彼の年齢を考えれば、そんな戦闘機械を撃墜することなど【ありえない】としか言えない代物でも合った。

驚愕に彩られる3人の表情を見れば、その困難さが窺えると言える。

見た目は麗しく華奢な少女たちなのだが、その正体と言えば危険という言葉が裸足で逃げ出すくらいの実力者といえる、少女達なのだから。

だが、言葉が自分たちの中で落ち着いて来たときの彼女たちの様子と言え、信じられない。

という色がありありと張り付いていた。

「本当のことなの？ それって……」

「スバルの言う通りだ、幼馴染と言うことだろう？ あの時に巻き込まれた時に、一緒に逃げている際の記憶を混同させているかもしれない」

「だけど、アインハルトの奴はダンのことじゃ嘘は絶対につかない、そう思えるくらいに入れ込み具合だったけどな……」

そういつてほとんど信じていない様子を見せる彼女達だったが、ティアナは頭を抱えながら、更に口を開いていく。

「彼女に言われて、記憶も確かめさせられたから、間違いないわ……」

「記憶を見たのか……？」

「ええ、信じられないなら、私のあの日の記憶を見てください！……
って彼女に言われてね……」

「そう、か…… 私達も良く食堂を利用させてもらっているからな、
今度言った時にでもそれとなく聞いておくでしょう」

「ええ、お願い」

頭を抱えてうめくように言っているティアナと、考え込む様子を見せる彼女達だったが。

チンクが場を纏めるような発言を行った後、ティアナもそれに同調し、この話題はこれまで。

そんなものを含んだ表情で、彼女達は一度頷き合っただった。

「ノーヴェー！みんなー！！」

場に広がっていた深刻な話題がちょうど良く過ぎた辺りで、彼女

達の最初の待ち人が来るのであった。

アレから学校を出た俺とアインハルトは、目的地を目指しているんだが。

さっきから。

「で、どこに行くんだ？」

「着いてからのお楽しみ、ですよ」

「それで何度目だよ……」

俺が目的地は何処か、という事を聞いてもアインハルトは楽しそうに笑うだけで、答えてはくれないんだよなあ。

まあ、アインハルトが楽しそうだから良いかね。

なんて考えている間が幸せであつたことを俺は知る。

何しろ、自分がとくに【原作】に関わっていることを思い知らされるのだから。

「あ、あの喫茶店です、待ち合わせをしている方々がいるんですけど、宜しいですか？」

「まあ、構わんが…… おりよ、ノーヴェさんにスバルさんたち……？ それにウエンディさん……？」

「知っているんですか？」

「ん？ ああ、アインハルトは知らなかったっけ、あの人達だよ、最近良く家を利用してくれて、しかも、ナカジマ盛りなんていう盛りを誕生させた人達ってのはさ」

「あの方達だったんですね……」

オープンテラスを持ったカフェをアインハルトが指したんだが、そこに揃う面子を見たと同時に俺の背中をいよゝな汗が伝う。

博麗の巫女並みの勘が叫びだし、アンサートーカーまでもが【行ったらエライことに巻き込まれるぞ！！】と叫びだす。

俺はすぐに後ろに向かって全速全身！！を実行しようとしたのだ

が、何時の間にやらアインハルトは俺の手を握っていたのだから驚いた。

ほ、本当に何時の間に……

ただ、俺の言葉を聞いた後、最後に確認するように彼女達（特に胸を仇のように見ていたんだが……）を眺めるアインハルトの目が、ちよつと怖かったのは気のせい、気のせい、だよな？

「じゃあ、ダン、行きましょう？」

「あ、うん、ニゲナイカラ、テヲハナシテモラエタラ、アリガタイナア」

「逃げないって約束してくれたら、良いですよ」

「うん、約束するサ！」

そういうやり取りが合つて放してもらえたんだけど、今度は腕とかを組んでない状態でぴつたりと引つ付いてきたから、間違いなく逃がすつもりはないな。

俺はこれから起こるであろう出来事に、人知れず溜息をつくのだった。

それにあの初等部の三人の女の子って、なんか見覚えあるんだが、気の所為かね？

などと考えながら俺達は近付いていくのだった。

それから俺達は彼女達の近くに近寄る。

「アインハルト・ストラトス、参りました」

「こんにちはっす」

「お、来たな、2人とも」

凜としてよく通る、透き通ってさえいるアインハルトの声に、気の抜けたというか間の抜けた様な声だったと思う俺の声。

俺達2人を確認したノーヴェさんはニカッ、とした清々しくもある爽やかな笑みを浮かべて、あの日に出会ったティアナさん、いつ

も家を利用してくれるスバルさんも微笑を浮かべていた。

ただ、初等部の女の子たちが俺を【ぼーぜん】と言った様子で見ている。

やっぱり俺も見覚えがあるなあ……一人は金色の髪に紅と翠の虹彩異色の女の子、次は灰色に近い髪を飴玉を包んでいる包装のようなリボンでツインテールにしている少女、最後は藍色と言える髪に黄色のカチューシャ？ リボン？ そんな感じのものをつけた女の子……

うーん、喉の奥に小骨が引っ掛かったような感じだなあ……
どこで見つけたっけ。

「こいつらが、お前らに紹介したかった連中なんだけど…… ヴィ
ヴィオにコロナとリオ、どうかしたのか？」

「『あ、あのー!!?』『』」

「お、おう……?」

考え込む俺と、俺達を指し示して彼女達に言っているノーヴェさん。

だけど、小学生3人組はノーヴェさんを無視して、俺に一気に詰め寄ってくる。

そのどれもが興奮と言うか、どうしてか、藍色の髪を持った少女

以外の二人は頬を上気させて、まるで【恋する乙女！】とでも言
つてしまひそうになる様子なのが氣に掛かる。

隣にぴったりとくっ付いているアインハルトからは、なんか、つ、
つ、冷たい、冷たいオーラがががががががががが！！！！

「あの時は、ありがとうございました！」

「……おお！」

「なにか、覚えがあるのですか？ ダン」

少女達が、一斉に頭を下げてきたことで思い出す。

あの日、初等部の図書館に新任の司書のおねいさんがやってきたから、それ目当てに行こうとした時、俺の目の前に落下してきた女の子達だ。

確か、金色の髪の子とツインテールの娘が落ちてきたんだっけ。

彼女達からのお礼の言葉を聞いたアインハルトは、純粋に疑問の色を強めた顔をこちらに向けてくる。

さっきまでの冷たい雰囲気が消えて、助かったあ。

「まあ、な、一ヶ月くらい前だったけ？　その時に俺が階段を上っていたら、この金髪のお嬢さんと灰色？　の髪のお嬢さんが落下し

てきてな、それを受け止めたんだよな」

「そうなんですか……」

「はい！あの時はヴィヴィオとコロナが大怪我を負う事を覚悟してしまつたから、だから、あの時は本当にありがとうございます！！」

「私とコロナも、下手したら死んじゃう所だつた所を先輩に救われました！だから、ありがとうございます！！」

「あの時からお礼を言いたくてずっと探していたんですけど、先輩だつたんですね！でも、あの時は本当にありがとうございます！！」

「あ、いや、うん…… まあ大した事はしていないから、なあ」

正直に言つて照れくさいというかなんと言うか……

周囲にいるスバルさんたちの視線も感謝の色というか、感心の色というかというものに変わっているしなあ、かなり照れくさい。

「そんなことはありません！」

「そうですね！！わたしもコロナも危ない所を先輩に助けてもらつたんです！だから大した事なんですよ！！」

「先輩、コロナとヴィヴィオを助けてくれて、あの時はお礼も言わせてもらえなかつたんです、だから今度は受け取ってもらいますよ

」！

そして、彼女達は俺の最後の言葉をより強く否定してくるんだけど、正直に言つて、俺は本当に大した事はしていないんだよなあ。何しろ助けて、なんかほっとけなかったから彼女達が持っていた本を全部俺が持つて、図書館に持つて行った位なんだし。

ただ、落ちたりした衝撃が強かったのか、俺の名前を聞いてくることもなかったし、受け止めた時の事を褒めるばかりだったから、名前もスルーしていたというのが本当の所だったりする。

「だから、あの時に出来なかったちゃんとした自己紹介、してくださいませんか？」

「ああ、まあ、大丈夫だけど……」

恐らくヴィヴィオという少女だろう。

金髪の娘が、俺にキラキラとした瞳を向けて言つて来る。

それに俺は頷くと、彼女はより表情を嬉しそうに輝かせて。

「わたしの名前は高町！高町 ヴィヴィオです！！ママも貴方のこ

とを知りたがっていました！ママの名前はなのはって言います！！」

ビシリ！

そんな音を立てて一瞬（コンマレベルで一瞬）俺の体は凍りつくのだった。

こ、この娘が、あの魔王さまの娘だとお！！！！？

…… ここで知り合ってしまったのが運の付きなのか……
なんて、俺は考えてしまうのだった。

第6話 若気の至りって奴は怖いよなあ…… だけどよ、今回の生で思うのは年

後書きのアンケートは締め切りました！お答えいただいた皆様方に

感謝の言葉を述べさせていただきます！

本当にありがとうございます！！

第6話 若気の至りって奴は怖いよなあ…… だけども、今回の生で思っのは年

俺は今、正直に言ってすぐに逃げ帰りたい！そう思っている
なぜなら。

「ミッド式のストライクアーツをやっている高町 ヴィヴィオとい
います！」

「ベルカ古流武術、アインハルト・ストラトスです」

目の前の広がるのは、2人の将来有望な美少女達が自己紹介と握
手をする姿、本来ならば非常に絵になる光景になるはずのそれ。

俺の目の前に広がっている彼女達の様子は、そんな物をぶつちぎ
る位に恐ろしいものだった。

なんでかって？

「所で、一つ聞きたいんですけど？」

「なにか？」

「ダン先輩とはどういう関係なんですか？」

所謂【修羅場】とも言うべき状況になっているからだ！
全く目が笑っていないアインハルトにヴィヴィオちゃん、仲良く握手をしているはずの手がお互いの手を、握り潰さんばかりにギリギリと握り締められているのが見て取れる。

「…… 幼馴染であり、私も彼もお互いを大事な幼馴染だ、と、そう思ってますよ？」

「へえ、じゃあ、今日から大事な友人である女の子、なんていう枠に私達が入っても大丈夫なんですね？」

「面白い冗談です」

「冗談なんかじゃないんですよ…… 私も、コロナも……」

「クスッ、クスクスクスクス……」

「ウフフフ…… アハハハハ」

正直に言おう…… 無茶苦茶怖えええええ！！！！

流石は次期魔王（血の繋がりはありません）候補の女の子だ……

何でこんな事になったのかねえ…… なんて考えるけれどもすぐに思い出せる。

あの時、俺に名前を言ってきた、それに答えた俺とヴィヴィオちゃんにコロナちゃんとの間にアインハルトがいきなり割り込んだんだ。

それからあんな調子で険悪ムード…… ちよつと離れた所で事の成り行きを見守っているスバルさん達がいるんだが、是非とも助けて欲しいものだ。

（スバさん、ノーヴェさんヘルプ！！！）
（（ゴメ、ムリ））

俺はこの場を収められそうなお二方に助けを求める視線を向けるのだが、彼女達は視線を逸らし、その上に他の方々にいたっては飛び火するのを恐れてか、俺と目を合わせてくれる人は誰もいないのだった。

人生って…… 無常だよなあ……

「vivividって何だろう？」

「第6話 若気の至りって奴は怖いよなあ…… だけどよ、今回の生で思うのは年上のおねいさんに性の付く交渉の手解きをしてもらって13までには脱・童貞を！ん、アインアルト？ ど」

それから俺達は区民センター内のスポーツコートに移動する。

元々の目的がアインハルトとヴィヴィオちゃんのスパーリングの為だったみたいなのだよ。

ただ、二人とも【殺る気】に満ちているのは、気のせいだろうか？

会話は互いに存在せずにコートの中央に立つ2人、互いに礼をして構えを取り。

「スパーリング4分1ラウンド、各種魔法の使用は厳禁、純粹に格闘のみな」

それと同時に言っているノーヴェさんの言葉に頷く2人。

彼女の言葉を合図とした様にアインハルトとヴィヴィオちゃんの間には、闘気と呼べるくらいの濃密な気配が立ち込めていく。

そして。

「レディー・ゴー……！」

ぶつかり合うアインハルトとヴィヴィオちゃん…… ふむ。

「へえ、大したもんだ…… ヴィヴィオちゃん、あの歳であんなに動けるなんてな……」

「ヴィヴィオも凄いけど、あの娘も凄いわよ、でもさ、ダンくんはどっちが勝つと思っているのかしら？」

「アインハルトで間違いないっしょ」

「ええと、それはどうして？」

ヴィヴィオちゃんの動きを分析して、純粹に感心した声を思わず上げてしまったんだが、ティアナさんにそのことを聞かれてしまう。うわっちゃあ、やつちまったい。

なんて思っても表に出さないように努力しつつ、即答に近い速度でティアナさんの問いに答える俺だが、スバルさんからも逆に問い掛けが来てしまう結果となってしまった。

因みに今現在の俺の位置はスバルさんとティアナさんに両隣を挟まれた位置に立っている、と言えば良いだろう。

もう一つ気になるというか、どうしてティアナさんは隙あらば俺の頭を撫でようとするのだろうか？ 確かに今の俺の身長を考えればティアナさんにとってはちょうど良い位置に俺の頭があるだろうが……

男だったら、撫でようとした手をバシン！と言う感じで跳ね除けるんだが、美人なおねいさんだしな、そんな真似はできないじゃないか！！

俺を撫でようとして、自分のしようにしていた行動に気が付いて、恥ずかしそうに口元をもごもごさせながらも、再トライしようとするティアナさんにとんでもない萌えを感じたわけじゃないよ？ ほ、本当に、本当だよ。

「確かにヴィヴィオちゃんの動きは凄いもんですよ、体を動かす瞬間

発力に柔軟さ、見た限りでの攻撃の重さ、体の動き、全部がそれな
り以上のレベルで纏まっています」

「へえ……（この年でそこまで見れるキミも凄いなと思うけど……）」

「だけど、あくまでそれなりです、アインハルトの奴はやんちゃし
てて、一応は実戦経験と呼べるものがありますし、それに……彼
女の動きに目の配り、戦い方を見る限り格闘戦に向いてな……」

「…… 続きを言ってくれるかな？」

スバルさんの疑問に答えていたんだが。

あやっべ、やりすぎた。

彼女達の目が語っている【君は何者？】と、考えるまでもなくお
かしさ満点だ！初見でこれだけの情報を見抜いただけじゃなく、資
質まで…… なんてな。

ニコニコと楽しそうに言ってくるスバルさんが、今の俺には悪魔
に見えてくる。

ヴィヴィオちゃんの母親があのかの【リリカル マジカル 魔法少女
高町 なのは2。歳です！】な、俺が一番恐れているお人なの
は確実だ。

アンサートーカーでも確認取ったから間違いない。

…… もしかしなくても詰みきった？ ダラ、ダラダラダラダラ
ダラと大量の冷や汗が出てくる。

ここでこれ以上の事を言えば、間違いなく魔王様に目を付けられ
る……！！

だけど、俺の言葉が続くことはなかった。
どうしてかって？ ヴィヴィオちゃんがアインハルトの掌底を受けて吹き飛ばされたからだ。

「……………（ダンさんの事、気になるけど……………アインハルトさん、
凄いー！！）」

戦いを見ていたんだが、二人があのだ調子だったのは最初だけで、
後はヴィヴィオちゃんは楽しそうに、アインハルトは戸惑いと悲し
みが籠り始めていたんだよな。

……………アインハルトから聞いていた聖王女とヴィヴィオちゃんの
印象が重なるから、アインハルトの奴は聖王女とやらとヴィヴィオ
ちゃんを一緒にしてしまったんだろうな。

それからアインハルトから受けた一撃に尊敬とかの感情で目を輝
かせるヴィヴィオちゃんに、苛立っている様子を浮かべるアインハ
ルトの対象的と言える姿。

やれやれだ。

そう思いながら俺はズボンのポケットから、とあるものを取り出
しながらアインハルトへと近付いていくのだった。

『え、ちょっと…… どうしてあんなのが、ポケットに入ってたの？』

『いや、ちょっと待ちなさいよ…… ポケット膨らんでなかったじゃない……』

『まさか、リアル四次元ポケットっすか！？』

なんていつているギャラリーの皆様を置いてな。

…… この構造だって？ スキマとかイロイロなものを試してたら出来た…… とだけ言って置く。

そして、アインハルトはそのままの様子で踵を返そつとする。
その瞬間を狙い。

「ゴルァ！」

「へぶっ！」

すばぁん!!という小気味良い音と共にアインハルトの頭を、ハリセン、で引ッ叩く。

それと同時に悲鳴みたいな声を上げるアインハルト、彼女にとっては予想外に痛かったのか、涙目でこっちを見てくる彼女。

そんなアインハルトを、俺は良く不良が鉄バットを肩に当てているポーズと、ついさっき口に入れたガムをくっちゃくっちゃとさせながら、彼女を見据える。

「何をどう思ったか知らんが、せめて終わらせ方くらいはちゃんとしろい!!」

「え?」

「おめえさんは武術を修めているだろうが、ここでは武道者同士の立場での試合なんだよ、武道の基本は礼に始まり礼に終わる!鉄則じやい!バカチンが!!」

「で、でも、いった!!」

「あぁん?　なんか文句あんのか!??」

「あ、ありません……」

俺の言葉になんか反論しようとしてきたアインハルトの頭を、俺は問答無用で再びハリセンで一閃する。

ほとんど同じ箇所を叩かれた所為か、より涙目になるアインハルト、ぼーぜん、としているギャラリーの皆様方。

「でだ、今日のお前は、最初のお前ら2人の動機とかはともかくとして、最初から真剣に相手をしてくれていたヴィヴィオちゃんに対して失礼な真似をしたのは、分るな？」

「は、はい……」

俺の言葉にしょげるアインハルトに心が少々痛むんだが、こいつのこれからを考えたら心を鬼にもせねばならんな。

何しろ、俺以外の友達が出来るかどうかの瀬戸際でもあるんだし。

「ノーヴェさん」

「な、なんだ？」

「来週あたり、またこうして集まりますか？」

俺の言葉に彼女達は一度目配せをしあうと、互いに頷く。

どうやら、他の皆さんからもOKがでたらしい。

「まあ、集まれるけど…… どうしたんだ？」

「そうっすね…… 今日のお詫びもかねて、ヴィヴィオちゃんとアインハルトの練習試合みたいなのを組みませんか？」

「いいぜ、それにヴィヴィオも、このままじゃ不完全燃焼気味だろうし構わないぞ」

「そんじゃ、決まりっすね」

俺の問いに答えるノーヴェさん、最後の俺の言葉を聞いて他の皆は嬉しそうな様子を見せて、アインハルトとヴィヴィオちゃんにエールを送っていたりとか、ノーヴェさんが俺に小さく頭を下げて謝罪するように手を向けてくるから、俺が割り込まなくても彼女が上手くやってくれただろうかね。

だけど、俺はハリセンを再び普通にポケットから繋がる不思議空間へと直すと、今はへたり込んでいるアインハルトの前に立ち、彼女の頭を、くしゃり、となでる。

「ふえ……？」

「そういうことだ、お前さんも大丈夫だろう？」

「は、はい……」

そう確認も取るのだった。

だけど、ヴィヴィオちゃんとコロナちゃんと思われる羨ましそうな視線がちよっと気になる。

…… フラグ立つてるとか？ まさかなあ！！それにこれから俺は肉体年齢的に。りたい盛りになるんだし、彼女達に気を向けたら犯罪じゃん！

ただ、ヴィヴィオちゃんにそんな感情を向けたりしたら、恐ろしいママさんが飛んでくるのは間違いないな、うん。

そんで俺に撫でられているアインハルトはというと、とっても嬉しそうにしていたのは気の所為かね？ なんか動物の尻尾があればブンブンと勢い良く振られているのが幻視されるんだが、なあ。

それから、スバルさんにノーヴェさんとティアナさんのお三方に誘われて、食事に行って家に帰ったよ。

俺がティアナさんに可愛がってもらおうとしたら、絶妙なタイミングでアインハルトに邪魔されて、楽しめなかったという特典付だけどな！！

それからの1週間はあっという間に過ぎ去っていき、約束の練習

試合の時となる。

第6話 若気の至りって奴は怖いよなあ……

…… だけどよ、今回の生で思っのは年

今現在エリオの扱いに迷っております。
選択肢としては2つです。

？はエリオTSのシヨタコン化、ダンのチェリーを積極的に狙いに
来る女性であり、アインハルトとギンガ、コロナヴィヴィオとのガ
チバトル勃発。

？はエリオは男であるが、シヨタのガチホモでダンの後ろを……
でも、普段はノンケを演じているが、フェイトとキャロは薄々感ず
いていて、エリオの矯正を図る。

というのが、候補なんです。

…… エリオは当初原作通りでの登場を予定していたのですが、感
想でTS要望があつたときに？のエリオが浮かんだ次第です……

ただし、このまま何事も無かつたら…… ？のエリオが登場します。

第7話 えーと、俺って詰んだのかなあ？ いやまだだ、まだ終われんよ！なん

アインハルトとダンを見送った後、スバルたちは帰宅する。
それからスバルは自室に入ると端末を開いていた。

『あ、スバルじゃないどうかしたのかな？』

「こんばんは、なのはさん」

『例のアインハルトって娘の事かな？』

「はい、って言いたい所ですけど……」

『何かあったの？』

いつものように優しい微笑を浮かべているのは【高町 なのは】であり、詳細は割愛するもののスバルが前に所属していた部隊では、彼女にとっては隊長でもあった女性である。

そう、今日のヴィヴィオとアインハルトの一件は既になのはに報告されていたのだ、流石に母親に何も言わずにスパーリングなどを行わせるわけにはいかないだろう。

だが、なのはの予想とは違ってスバルの言葉は含みを持たせたものになっていた。

「なのはさん、私が前に言っていた五反田食堂って覚えてます？」

『スバルが美味しい定食屋さんだったお店で、ギンガも良く通っているお店だね？』

「はい、実はアインハルトと一緒に、その跡取りの彼女と同級生の男の子も一緒にいたんです、アインハルトと幼馴染だったみたいで」

『ふむふむ』

「なので、スパーリングに同席していたんですけど、彼」

『彼？』

「ヴィヴィオとアインハルトのスパを見て、すぐにヴィヴィオの適正などを正確に見抜いていたんです」

『うそっ！？』

驚愕、その感情を顔に貼り付けるなのはに、無理もないとスバルは考える。

実際に目の前で見ていた自分でさえも信じられない、というのが心境だったのだから。

ジェイル・スカリエッティ事件通称【J・S】事件と呼ばれるそ

れを経験して来た自分なら、ある程度の事は見抜けるようにはなってきた。

だが、彼は今まで平和に、尚且つ普通に過ごしてきたはずの少年なのだ、そんな彼が僅かな時間で他者の適正を見抜けていたということは天性の才覚を、それも極上のものを持っていることもあるのだから。

「信じられないのも無理は無いと思いますけど……」

『うっん、信じるよ、スバルの言葉でもあるしね』

「ありがとうございます、なのはさん！」

『だったら、アインハルトちゃんだけじゃなくて、ダン・ゴタンダくんとも会ってみた方が良くもね……』

そのやり取りの後、スバルは手元に一つの端末を取り出すと、それを見ながら口を開く。

「なのはさん」

『どうしたの？』

「実は、ティアナがダンくんの事を調べるといって彼の事を調べて

いたんです」

『スバル』

「え、あいや、違うんですよ！流石に彼のプライベートは調べてないですよ！」

『当然だよ』

スバルがいていた【調べる】という言葉になのはは咎める空気を出しつつ、彼女を見据えていた。

それからスバルは慌てて弁明すると、なのはの雰囲気は少し軽減されてはいたが、変わらずになのはの表情は厳しいままであった。

それから暫くの間、言葉のやり取りを繰り返し、なのはは納得と驚きを何度か見せ、スバルはそんな彼女の様子に頷きながら話すのだった。

「vivividって何だろう？」

「第7話 えーと、俺って詰んだのかなあ？ いやまだだ、まだ終われんよ！なんとしても逃げ切ってみせる！魔王からなあ！！」

そんでもって1週間という時間はあっというまに過ぎていく。

俺がなにをしていたのかって？ アインハルトに付き合わされて朝と夜の鍛錬に付きあっていたさ。

爺さんはアインハルトとの時間を大切にしろい！とかいって、店を手伝わせてくれなかったし、親父やお袋たちもな〜んか、からかいを含んだ笑みを見せたからなあ。

アインハルトとの関係を誤解している可能性が高い、何しろ昨日、爺が【曾孫をとっと見せやがれ】とか言って来たし……

いや、ちょ、そんな行為はアインハルトが嫌がるだろうし、俺達はまだちうがくせいだぞ！？ 確かにミッドでの就業年齢と結婚適齢が低いからって！

因みにこのSS内での結婚適齢は男女とも十代後半だ！

だけど1週間の間で感じたのは、やっぱりアンサーカーってマジチート。

霸王流、現代では完全に失われて、アインハルトでさえもまだまだ本当に効率の良い鍛錬方法は確立できてなかったのに、それをあつさりと非常に効率の良い鍛錬メニューの答えを出してきたんだしな。

…………… 管理局辺りにレアスキルとして認定されたりしないよな？　しないよね？　しないだろうな。

こればかりは他の能力とは違って、話さない限りバレないだろうし、大丈夫だな！うん！！

これをフラグと感じた俺は…………… 疲れているんだろうか？

そんなこんながあつて、練習試合当日の今日。
俺はアインハルトと校門で待ち合わせて、約束の場所へと向かっていく。

「んで、自信の程はどうだ？」

「ダンが霸王流にとって一番良いメニューを考案してくれたんです、絶対に勝ちます」

「そっかい」

「はい」

問いかける俺に自信満々と言う様子で答えてくるアインハルト、なんかバトルジャンキーというか、そんな氣質が最近見え始めたのは、気のせいと思いたい。

でも、彼女の自信も尤もだ。

1週間前は確かにかなりのレベルで纏まっていたが、動きに不安定さを見せていたのだ。

それがかなり改善されて見えなくなってきた上に、彼女自身の体力もダンチになっているんだ。

これで負けたらヴィヴィオちゃんの才能は、某野菜人並みのものだろう。

だけど俺は彼女の才能はそれくらいあるんじゃない？　とも考える。彼女の母親の若い頃を考えたら、分る。

まあ、それもこれから分るかね。

それから始る二人の戦い、え、始まる前のやり取りはって？

…………… アンサートーカーから自動的に、原作と同じ
だったという答えが強制的に還って来たんだが……
もしかしくなくても、俺って既に原作に関わってんの！？

そして、もう一つ気になるのが……

「へえ、キミがダン・ゴタンダくんだね、初めましてヴィヴィオの
ママの高町 なのはです」

「…… ど、どうも、ダン・ゴタンダです……」

何でここに魔王様がいの！？

さっきから背中が冷や汗でびっしょりだ！流石は魔王だ、なんと
いうプレッシャー（注：ダンの勘違いです）なんだよ！

「ね、ダンくんって呼んで良いかな？」

「ど、どっぞ……」

「じゃあ、私の事はなのは、って呼んでね！」

「う、ういっす…… なのはさ、ん……」

「？ 何か変な間がなかった？」

「い、いいい、いや、気のせいっすよ！？ なのはさん！」

俺にあくまでフレンドリーに、尚且つ麗しい微笑を浮かべて話しかけてくるのは様。

一瞬、彼女の事を様付けで呼んでしまいそうになるが、ここで様をつけて呼んでしまうとかなりヤバい状況になるのは明白だ！

すぐに言葉を訂正する事で、その場を凌ぐ。

『あれは、照れているのか……？』

『どっちかっていうと、恐怖で震えているようにも、感じるっすけど……』

『あたしも、そう思うが…… あの二人、会った事なんてあったか？』

『会った事すらないと思いますが……』

『まさか、なのはさんが小さいあの子にトラウマを……』

なんてヒソヒソと言っているギャラリーの皆様方だが、前世での

このお方の容赦のなさを知っている俺としては、失礼に当たらない対応をするので精一杯だ！？

え、アインハルトの変身シーンで目潰しをされなかったかだって？ 現実には丸っこい球体の中で変身して、それがガラスが割れるように出て来るんだよ。

別に裸の女性の姿が見れるわけじゃないんだよ？ まあ実際に見れるとしても、ボインと言えるスバルさんや美なティアナさんにノーヴェさん達ならともかく、ぺったこなヴィヴィオちゃんとアインハルトの裸見ても何も感じる事はない

「へんぶろっふん！！！」

「だ、大丈夫ダンくん！？」

そんなことを考えていた俺の顔面に、二人分のシューターが直撃する。

そのまま重力に抗いきれずに後ろに倒れる俺、驚愕の表情を浮かべて俺を心配するなのはさんの表情が印象的だった。

だけど、一つ言いたい…… 青と白の水玉っすか…… 大人のはやっぱり素晴らしいです。

なんて考えた瞬間に、アインハルトの一撃が更に集中したのは言うまでもない。

それから意識を失っているらしい俺は、何か温かくて柔らかいものの上に寝かされていることが分る。
俺の右側はあったかい壁？ 見ただけで柔らかくて良い匂いがある。

俺は無意識でそっちへと顔を向けて、体を寄せていく。

『ちょ…… なに！…… ってるんで！……！……！』

『まあまあ…… アイ…… ち…… ダ…… は気絶……』

いい匂いとあったかくてやーらかい壁、それに包まれて俺は幸せな気持ちを存分に感じていた。

「いい加減に起きて下さい！！というか、起きているでしょう！！
ダン！！！」

「うい」

声を荒げるアインハルト、こんな彼女の声にどうしてか逆らえない俺は、素直に体を起こそうとする。

だけど考えて欲しい、俺は今、体全体を右側に向けて寝ているのだ、その状態で無理矢理体を起こそうとすればどうなるか。

賢明というか、普通の皆なら分るよね！？

「きゃっ！？」

「こ、これは少なく見ても、D！ブルウアア！！！」

とつてもおつきくて柔らかいマシュマロに俺の横っ面は包まれるのだった！！

その瞬間、俺は引っぺがされてアインハルトによって一瞬で上空へと打ち上げられた。

きりもみ回転で打ち上げられる俺は、胸を押えて無茶苦茶萌える表情と体勢をしているのはさんと、その彼女に頭を下げ謝るアインハルトを見ながら。

「ぶべらぶつ！！」

見事な車田落ちと犬神家状態を地面で披露するのだった。

その後はギャラリーの皆様方に救助されて、アインハルトが気絶しているヴィヴィオちゃんに自己紹介するなんていうイベントがあったんだが。

「痛いです、ティアナさん、スバルさん」

「全くしょうがないというか、なんと言つかよねえ……」

「よしよし、ダンくん（ギン姉がいたら大喜びで、この子を抱きしめてただろうね）」

なんていう感じで彼女達に甘えているのだった。

こういう時って年下で、幼いって便利だね！

大人って言うか、高校生にでもなれば間違いない犯罪だしね！

第7話 えーと、俺って詰んだのかなあ？ いやまだだ、まだ終われんよ！なん

まだ魔王様とのフラグは構築されていませんし、模擬戦での戦闘のフラグも構築するはずだったのに……

どうしてこうなった？

と言いたい作者です。

第8話 残念だ…… とつくに魔王様からは逃げられなかっただなんて……

TSエリオ、このSS内ではエリナと名乗っております。

台詞のみで数行登場…… 彼女がどういう行動に出るのかは、また

次回、と言うことで。

第8話 残念だ…… とつくに魔王様からは逃げられなかっただなんて……

それから数日経ち、俺とアインハルトは落ち着いたいつもの日常を過ごしていた。

俺がアインハルトの鍛錬に付き合うのは朝だけで、夕方は彼女がストリートファイトをする前のものに戻っていた。

そう俺と一緒に店に立っているんだよ。

本当にいつも通りの日常が帰ってきたんだなあ、なんて考えていて油断していたんだよなあ。

まさか、アインハルトがこんな事を言うなんて……

「あの、ダン……」

「どうした？」

「うう、あの…… その……」

「？」

先程までこつた返していたお客さんも落ち着いたので、俺とアインハルトはまかないを食っているときに、彼女は顔を紅くして、も

じもと体を動かしながら、言い難いことを言い出そうとしている。
ちやかちやかと飯を掻きこむ俺だが、意識は彼女に向けているの
は言っまでもない。

そして、意を決したように彼女は顔を真っ赤にさせて上げると、
仰天する一言を大声で言い放つのだった。

「わ、私と一緒に旅行に行つて！私を大人の女性にしてくれませんか！！？」

「ブフウアアアア！！！！！！」

おもいつくそ噴いた。

味噌汁口の中に入れていたのが、不運だったなあ。

勿論アインハルトとは逆の方を向いていたよ！！

「vivividって何だろう？」

「第8話 残念だ…… とつくに魔王様からは逃げられなかっただなんて…… でも、ある意味パラダイスになりそうなのは気のせいじゃないよねえ？」

それから俺は噎せ込みつつ、爺に凹られるという体験をした時、俺が噴出した物はアインハルトが片付けた（普通に布巾で拭き取っていた）後、改めてアインハルトの隣に座り直す。

「で、アインハルト」

「は、はい！」

「いきなりなんでそんなことを言い出したん？」

溜息に近い息を吐きながら俺は、彼女に問いかけるんだが、アインハルトといえば。

今やっと自分の発言のヤバさに気が付いたらしく、顔をさっきまでは比べ物にならないくらいに紅くして、蒸気を噴出しそうな様子で俺に返事を返していた。

あ、アインハルトの頭の上に実際に蒸気がシュウシュウと上がってる。

「あ、あううう……」

「……」

目を漫画みたいにぐーるぐるとさせながら、彼女は暫くの間、そうしていた。

口をもごもごとさせて頭からは蒸気を出していた、いた彼女は、暫く経ってようやく元に戻ったらしく、一度コホン、と咳払いをし

て俺の方を見る。

「じ、実は今週末から、ノーヴェさんから異世界への旅行を兼ねたトレーニングに誘われたんです」

「それを聞くのに、どうしてさっきみたいな言葉になるんだよ……」

「あう……　そ、それは……」

「それは？」

「ううう……　（私が貴方に一番して欲しいことだからです！　つてい
えたら……　うう……）」

彼女の言葉を聞いた俺の中にあつた一番大きな感情は、呆れ、これだった。

なんで俺を旅行に誘うだけなのに、あんな言葉になってしまっただよ。

周りにいる連中に誤解を与えるだろうが！

なんて考えていた俺だが、ふむ、週末、ねえ……

「連休はお客さんも多くなるし、俺はなるべ「良いじゃない、行つて来なさいなダン」は？」

週末は4連休という社会人の人達にとっては、大型の連休にもなる時だしな、普通にお客さんが増えるのさ。

いつもの週末でも増えるというのに、因みに、アインハルトは週末については彼女が希望した日だけ手伝ってもらっている。

忙しさなんて平日の比じゃないしな。

そんな感じのことがあるから俺は断ろうと考えていつていたんだが、俺の言葉を聞いている内にアインハルトは【予想通りだった】といわんばかりに、シヨボーン、としていた。
俺の言葉はいきなりお袋によって遮られる。

俺とアインハルトの背後にいきなり現れたのは【レン・ゴタンダ】三十路を越えて、小皺が目立ち始めている我が母殿である。

「何か変な事を考えてないかしら？ アンタ」

「い、いえ、なにも……」

ピタリ、と俺の頸動脈付近に当てられる金属質のナニか…… ほ、包丁だと！？ 何時の間に用意したんだよ！！

厨房では今しがたまで野菜を刻んでいたはずの、包丁が消えた事に驚く爺の声が聞こえてきたから、爺でさえも認識できないくらいの速度で母殿は包丁を奪って俺の頸動脈付近に突きつけている。

という事なのか！？ ええい、ゴタンダの一族は化け物か！？（父親除く：入り婿状態なので）そういいなくなる。

それからお袋は少しの間ニコニコと微笑みながら、包丁を当てていたが、それを外して爺に返すと俺に向き直る。

「まあ、それは置いておくとして、アインハルトちゃんたちの旅行、アンタも一緒に行って来なさいな」

「いや、大丈夫なのかよ？」

「そういう所もアンタの美德だけどね……」

母殿から言われた言葉はある意味では、予想通りのものだった。何しろ俺がアインハルトに断りの返事を返そうとした瞬間に、お袋と爺のものと思われる怒気を感じたし……

自分の娘みたいに思っているからか、アインハルトにはお袋も爺も甘いんだよなあ。

今まで彼女がこういったことを言わなかったのもあったんだろうな。

それでも家のことを気にしている俺に呆れた様子を見せるお袋、ん？　なんで呆れた様子を？

「アンタ達が今を過ごしている青春ってのは、大人になったら戻ってこないんだから、お友達と旅行とかも醍醐味なんだから、楽しんできなさい」

「ふむう…… まあ、分るけど……」あの、ダン……」どした？
アインハルト」

お袋の言っている事は分る。
確かに社会に出たら、もうこんな時間はやってこないだろうという事はな。

前世の死因が修学旅行中に起きた事故だったから、余計に思う。
一瞬だけノイズのように浮かぶ【地獄】とも呼べるあの光景、呻き声を上げている皆、自分の腹に突き刺さったバスの部品、そして救えなかった奴等と、その時に願った今みたいな力の事……

そんな思いの底に行こうとした俺を、引き戻すようにアインハルトの声が聞こえてくる。

俺はちよつとだけ慌てて彼女のほうに顔を戻せば、申し訳なさそうでいて、尚且つ、強い決意が籠った瞳を俺に向けていた。

「私は、貴方と一緒に行ってみたいんです…… ダメ、ですか？」

「……………」

瞳を潤ませ、唇も震わせて俺を見ていつて来るアインハルト。

これで俺が断ってしまった俺って悪役じゃねえ？ しかもビンビンに感じる爺とお袋のものと思われる殺気に近い視線、こういう時にストッパーになりそうな親父は頼りにならないから普通に働いている。

俺は受けても良い、受けて良いんだよ？　　というかアインハルトって超・美少女！だしな。

うん、後3年経って誘われていたら間違はなく、後先考えずに即答でOK！を返していたのは間違いない。

何で返事を躊躇っているのかって？　当然だ、ノーヴェさんたちといっていたからな、確実に魔王も来るんだぞ！？　あの時は大人の色香であっさりと落ちかけた自分が悔しい。

あの時見えた下着は……　眼福でやした……　まあ、それは置いておいて、ちょうど良い記念にもなるし、タイミングも良かったかねえ。

一度、家のお袋が親父に引率してもらって1泊2日くらいの小旅行みたいなのを企画してたしな。

本当にちょうど良かったかねえ。

「まあ、お袋もこういつていることだしな、俺も付き合っさ」

「ッ！ありがとございます！ダン！」

「お、おう」

俺の了承の言葉を聞いた瞬間、まさに【華が咲いた】というべきとても綺麗な笑みを浮かべるアインハルト。

それにちよつとドキッ！としつつも俺は、普通を心がけて返事を返すのだった。

……………
爺とお袋がニヤニヤと見ているが、気にしない事にするでしょう！

なんて事をやっていた俺は知らない……

「あ、フェイトちゃん、今週末からの旅行のメンバー決まったよ」
「参加するのは…… エリナにキャロ、ノーヴェにスバルとティアナ、ヴィヴィオとコロナちゃんにリオちゃん、それとアインハルトちゃんとダンくんだね」

「賑やかな旅行になりそうだね！」

「そうだね、なのは」

「でも、さ……」

「うん、分ってるよ、なのは」

「エリナがダンくんに変な事をしないように、きちんと見張っておかないと……」

「エリナ、今度の旅行で、年下の男の子がいるけど……」

「大丈夫、だよ、キャロ」

「…… ホッ」

「ちゃんと、怖がらないように私が優しくエッチにリードするから！」

「全っ然大丈夫じゃないよ!!?」

という、あまりにも変すぎる会話が某所で行われていた事など……
ただ。

「ッ!?!」

「ど、どうかしたんですか？ ダン？」

「せ、背筋に悪寒が……」

「風邪、でしょうか？」

「って、ちょ、アインハルト何を!?!」

「じつとしてください、熱があるかもしれませんから」

悪寒を感じた後は、ちよつと役得っぱいこともあったけどね！

だけど、未だに拭えないのは、どうしてだろう……？ 博麗の巫女並の勘も、アンサーターカーも嫌な方向でのだんまりを決め込ん

でるし……

ま、まあ、気にしない方が良いでしょう！俺の精神衛生上の……！！

それから時間が経つのは早いもので、俺は今現在次元港へ向かうためにフェイトさん運転の車の中にいた。

4人乗りの車の中には、運転席にフェイトさん、助手席には俺、後ろにはアインハルトが座っている。

「さっきもなのはさんたちに言いましたが、お誘いいただいてありがとうございます、フェイトさん」

「気にしなくて良いんだよ、 Dankun、私もキミやアインハルトちゃんと話してみたいこともあったから」

地球産の何か見たことのある車、確かこれって、稀少品じゃなかったか？

そんな車を運転しながら、俺の言葉に大人の微笑を浮かべて言っているフェイトさん。

今日、最初に見たときから思っていたけど、やっぱりすんばらしいおっぱいだなあ……

そう思っつついつい俺の目はフェイトさんの胸へと、母性の塊へと視線を向けてしまう。

年下だからこそ許される女性へのセクハラを堪能しようとした瞬間、俺の後頭部に物理的圧力さえ伴ってアインハルトからの視線がぶつかってくる。

OH！バレバレだったのか！？俺のフェイトさんへのセクハラは！？

「……………（ダン、何を見ているんですか？）」

ち、チラリ、とアインハルトへと視線を向ければ、俺をジトとした目で見ている俺の麗しの幼馴染さんが、そこにいた。

ただ俺達のこんな様子はフェイトさんにはお見通しだったようで、クスクスクス、と本当に綺麗な微笑を浮かべていた。

「ダンくん」

「はい」

「アインハルトちゃん、っていう綺麗な幼馴染がいる前で、ほかの女の人に目を移しちゃ、ダ・メ・だぞ」

「う、ういっす……」

フェイトさんには全てお見通しだったらしい。

というか、第一期や第二期と比べて大分性格変わっている気がするなあ、やっぱり、これが時間の経過って奴なんだろうな。

まあ、俺にとってここは今現実なんだし、俺が見た彼女達の物語の舞台から10年以上経とうとしているんだし、当然か。
なんて考えていた。

「え、えーと、アインハルト……」

「なんですか？」

俺が彼女に呼びかければ、ムスツ、と頬を膨らませている彼女の姿が後部座席にあった。

うーん、どうやって機嫌を直してもらおうか？　なんて考えてい

た俺は、向こうには川があつて、そこで泳ぐとか聞いたなあ。

なんて考えていたのが、致命的だったのかもしれない。

「お前の水着姿、楽しみだなあ」

「へ、へえあ!？」

「き、キミって…… 天然なのかな？」

苦し紛れにはあつたが、言い方はかなり真剣に言つた一言を聞いたアインハルトは、一瞬で顔を真っ赤にさせて、蒸気さえも顔から噴出させていた。

あれ、何か言葉間違つた？ そう考えた後からは、何か微妙な雰囲気のまま、次元港へと車は走っていくのだった。

終始アインハルトが意味深な視線を向けてきて、フエイトさんはかなり微笑ましいものを見る笑みを向けてきたのが、ちょこつと気に掛かったがなあ。

第9話 アバンで存在だけ出て来た天災って前世で見たことがある気がするの

sonで持つて今現在俺は皆様と一緒に無人世界【カルナージ】へと向かう臨行次元船の中にいた。

だけど、自由席だからと言われて適当に座った際にアインハルトとヴィヴィオちゃんにコロナちゃんがじゃんけんをしていたのは、どうしてだろう？

リオちゃんは疑問気に彼女達を見ている俺を呆れたように見ているし、スバルさんたちはといえば何処か微笑ましげにニヤニヤしている。

そのうちに決着が付いたのか、一人の少女がこちらに嬉しそうに近寄ってくる。

「ダン先輩！あ、と、そ、その…… と、隣り、良いですか!？」

「おう、大丈夫だよコロナちゃん」

「で、では!」

嬉しそうというか緊張しているコロナちゃん、彼女は俺の了承の返事を聞いてから、おずおずと座ってくる。

座ってからというもの、何が嬉しいのかニコニコとしている。

それから少しの間は、そのままだったんだが、彼女が何度か俺に

話しかけようと口元をもにゅもにゅさせて、顔を赤くして指先をツンツンと合わせているから。

間違いなく俺と何かを話したいんだろう。

え、それが分っていて眺めているのはどうしてかって？ ……：

… 恥ずかしそうにもじもじとしているコロナちゃんに、途轍もない萌えを感じたからでは決してない。

そして話しかけるのもアインハルトからの無言の圧力に屈したわけじゃないよ。

「そういえばコロナちゃん」

「は、はい！なんでしょう！？」

「ヴィヴィオちゃんたちに聞いたんだが、ゴーレムの創成や操作とかが得意なんだって？」

「え、いえいえそんな！私なんてまだまだですよ」

これはヴィヴィオちゃんにチラッと聞いて、俺がアンサートークで確認したから間違いない。

というか彼女のゴーレム関係での適正が滅茶苦茶たけえーの、恐らくこのまま努力し続けたりしたらかなり化ける。

うん、間違いなくな。

それから俺はいい具合に緊張がほぐれたらしい彼女と談笑を楽しんでいたんだが、会話がなくなつて妙に静かになつたなあ。

なんて考えたら俺の肩にいきなり重みが加わつたから、そちらを見れば。

「くう……すー……」

コロナちゃんが寢息を立てていた。

どうもこの旅行に参加するために勉強とか頑張っていたらしいしな、友達と参加したいから、こんなに頑張るなんて、健気でいじらしいもんじゃん。

なんて考えながら彼女を起こさないように、毛布を取り出して掛けてあげていたんだが、アインハルトが不満そうに頬をプクツと膨らませているのがちよつと気に掛かる。

…………… 着いたら、アインハルトのご機嫌取りが先かね。

なんて考えた俺の携帯端末にマナーモードで、メールの着信があったことを知らせる振動が伝わってきた。

そして、俺はそれを開くと、ちよつとだけ懐かしいメル友からのメールだったので、俺は表情を綻ばせるのだった。

「お、スカさんからじゃん…… 4年位前から連絡取れなかったのに…… やっぱ夜逃げしてたのかね？」

そう、それは6年位前にネットで知り合ったH・N【スカリエツ ティ 通称：スカさん】とか名乗る変態科学者からだったのだから。何かヤバい事してそうだったからな、夜逃げくらい簡単にしてそうだ。

なんて考えてたら本当に連絡つかなくなったからな、近所のマンションの中に住む、ウサミミをつけて一人ヘンゼルとグレーテルをやっている天災の女性と一緒に、スカさんは夜逃げしたのか？ それとも管理局にお縄になったのか？ で賭けをしたのは記憶に新しい。

答えは、今現在着信した画像付きメールで分るか、と思い俺はメールを開くと。

『ただいま監獄で囚人プレイ&放置プレイの両方を絶賛満喫中だよ、そっちは元気かい？』

「相変わらずこの人ぶっ飛び過ぎてて訳分らねえ……！！」

囚人服&手錠といった囚人装備諸々をつけて恍惚としてポーズを

決めるスカさん…… 何がしたいんだアンタは？
そう言いたい気持ちで一杯だ！？

因みに……

『え、えつとなのは、ノーヴェ…… アレって……』

『あ、あの時のジェイル・スカリエツィだと思っけど……』

『そういえばドクターって計画開始の2年くらい前から、計画に興味を示さなくなってウーノ姉達に突き上げられてたけど……』

『それはチンクちゃんたちからの供述で聞いていたけど、まさか、その理由って……』

『分らないっすけど、多分だけど、間違いないかなあ…… っと思
いますよ、ドクターが合体変形機構付ガジェットの開発に夢中にな
り始めた時期も、その頃ですし』

『ヴィ、ヴィータが苦戦したって聞いた超機合身ファイナルガジェ
ット！ってまさか、それって……』

『ダンくんとOHANASIしたいけど…… 確証をえてからにし
た方が良くもね』

『なのは、ダンくんはまだ小さい子供なんだから、ちゃんと手加減
してあげないとダメだよ』

なんていう会話が念話の上で広げられていた事に気が付いていな
かったんだが、後々にウサミミの天災の方は登場するじえい。
とだけは言って置く。

え、スカさんはどうなんだって？ アハハハハッ！やだなあ！今回限りの特別出演に決まっているじゃないか！！

くvivividって何だろう？く

く第9話 アバンで存在だけ出て来た天災って前世で見たことがある気がするの、気の所為か……？ 名前にも聞き覚えあったし……く

それから無人世界【カルナージ】へと付いた俺達は、20分ほど歩いた場所にあったコテージ風の建物の前に兆着していた。

俺達を出迎えるように建物の前で二人のおねいさんたちが待っていたんだが、どっちも美人さんだあ！！

特に大人の色気をむんむんと醸し出しつつも、包容力のありそうな女性には溜まらんとです！

それに横にいる妹さんと思しきおねいさんもグツだ！！なんて考えていた俺を放置して、なのはさんにフェイトさん達が挨拶を交わして、オトナな会話をしていたんだが。

「ルーちゃん！」

「ルールー！久しぶり！」

「久しぶり、コロナ、ヴィヴィオー！」

ヴィヴィオちゃんはともかくとして、コロナちゃんもここにきたことがあるらしい。

仲良さそうに挨拶を交わす彼女達、リオちゃんとも話しているから顔見知りではあるのだろう。

「……………」

そんな中でアインハルトといえば、また人見知りというかそんな感じのが始つたらしく、俺の右手を握つてちよつとダケ強く力を込めて来ていた。

こいつも見知らぬ人ともう少し仲良く話して欲しいんだけどなあ、なんて考えるけれども、いつもの事か。
なんて考えて俺は苦笑いを浮かべる。

そんな俺にアインハルトはムツとした表情を浮かべるものの、すぐにそれは奥へと消える。

そして、ルールーとか呼ばれていた少女は俺達の方を向くと、俺と手を繋いでいるアインハルトを見て、ニヤリ、とからかいを含んだ笑みを浮かべる。

それを見た俺は自然を装って手を離すんだが。

「あつ……………」

「ん？ 何した？」

「い、い、いえ……………」

手を離れたと同時にアインハルトの奴は切なげな声を上げていた。それと同時に今まで繋いでいた手を所在なさそうに胸の所に当てたりとかしているんだが、本当にどうしたんだろう？

ただ、気になるのが…… リオちゃんやなのはさんといった方々からの非難じみた視線もちょっと気になる…… 対照的にヴィヴィオちゃんやらコロナちゃんたちは複雑な視線を向けているのはどうして？

「あ、ルールー！この人達がメールでも話したお二人」

「ダン・ゴタンダっす」

「アインハルト・ストラトスです」

なんて考えていたが、気を取り直したらしいヴィヴィオちゃんが前に出てきて、俺とアインハルトを指し示しながら挨拶を促すようにしていた。

その様子を見た俺は一瞬だけ、ルーさんと呼ばれたおねいさんへの性的悪戯でもしようか、とか考えたのだが、背筋に走る謎の悪寒を感じて、やめるのだった。

「ルーテシア・アルピーノ14才です、よろしくね、お2人さん！」

そういつて挨拶をしてくるルーさん、もといルーテシアさんに俺達も一礼を返す。

返しているんだけど、この時点から俺の本能が今すぐにこの場からの撤退を進言してくるのが気に掛かるし、なのはさんやフェイトさん達が俺だけに何かのジェスチャーを送っている（彼女達はダンに早く家の中に入って！とジェスチャーで叫んでいます）のも気に掛かる。

なんだろう、何が起るんだろうか？　なんて考えた俺は次の瞬間に思い知る。

なぜ、彼女達があんなジェスチャーを送っていたのかを。

それからルーテシアさんが俺達と話そうとした瞬間、ルーテシアさんの表情はどう表現すれば良いのか、出会わせられないのが出

会っちまった！とでも言いそうなくらいに一瞬だけ、歪んだのが気に掛かる。

まあ、良い……　っ！？

なんて事を考えた俺の背筋に今までにない悪寒が走る！！な、なんだこいつは！？　ぜ、前世さえも含めて初めて味わう感覚だ！！そんなことを考えている俺だが、後ろから近付いてくる人物たちを視界に入れることには成功していた。

1人はピンク色の髪に白いブラウスと淡いピンク色といえるスカートを着た、俺と同じ年くらいの女の子。

もう1人が赤い髪にそれと同じ色のワンピースを着た女性の2人だったのだから、どうも俺の本能やルーテシアさんや他の皆様方は、この女性に何かを感じているらしい。

「お疲れ様です！」

「エリナにキャロ！」

ピンク色の髪の子が俺達に声を掛けてきたと同時に、フェイトさんやラヴィヴィオちゃんたちが嬉しそうにしているんだが、お知りあいらしいな。

それからエリナと呼ばれた赤い髪の女性が、ノーヴェさんたちに【背が伸びた】とか、ピンク色の髪の子が【私も伸びましたよ！】なんて主張してたんだが、俺の本能にルーテシアさん達の反応

はなんでなのかが、全く分らないままだった。

「あ、ダンくんにアインハルト！紹介するね、この2人が私の家族の」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです！」

「私がエリナ・モンディアルです…… よろしくお願いします」

それからフェイトさんが彼女達を紹介して来るんだが、キャロさんは普通だとしても…… エリナさんが一瞬だけ浮かべた意味深な微笑が気に掛かる。

なんか、性的な意味で捕食される危険を感じたというか、男の象徴であり息子とも呼んでいるアレが、恐怖と思われる感情で縮んだ感覚まであったのだ。

こ、これは…… 一体？ なんて考えていたら、エリナさんが俺の目の前にいつの間にか立っていて、俺に右手を差し出してくる。

「キミの名前、教えて欲しいな？」

「う、うつす、ダン・ゴタンダです……」

「ダンくん、ダンくん、かあ…… うん、よろしく」

一見すればにこやかに微笑む彼女、おねいさん大好きな俺が尻込みしているだ！？ く、屈辱だ！！

なんて考えて彼女の顔を見てしまうと、あ、やっぱムリっす。

などと考えてしまったのはムリもないだろうというか、俺の正直な心境だ。

というか、年下相手にここまでがつつく人も初めてだ…… ギンガさんも何気に年下が好みらしいが、あの人とは対極に位置する存在だ！

何しろ、ギンガさんが搦め手とか使ってじっくりと攻めてくるのとは違って、彼女は直球、それも俺にそういった感情を向けてます！っていつのを隠していないのだから！！

あ、後ろでなのはさんにフェイトさんやらノーヴェさんにキヤロさんが謝る様に片手を上げてる…… 謝るくらいなら助けてください！！

それが俺の正直な心境である。

ただ、今現在の所としては、握手している右手を離してくれないかなあ！！

と言いたいのが俺の心境だ！！！！

『ちよ、なのはさんにティアナ、エリナの好みのタイプって、年下

だったんですか？」

『いや、スバル、アンタどうして知らなかったのよ……』

『だって、研究所あの娘って年上の男性から酷い目に合わされてたからって、それで年下が好みのタイプだとか思わないじゃん!？』

『ま、まあ、そうだったんだけどね……　ダンくんがどうも好みのタイプを全部満たしてたらしいから……』

『それで、出会った今日この日から、強烈にアプローチと言っわけですか……』

『でも、アンタのお姉さん、ギンガさんも彼を可愛がってるんですよ？　出会ったりしたら最悪じゃないの？』

『あ……』

『な、なのはさん？　ま、まさか……　ギン姉も参加するとか？』

『だ、大丈夫、ギンガは今日の夜に来るって言ってたから、だいじよう、ぶ……　うん、たぶん、きっと、ぜったい、たぶん……』

なんていう会話をスバルさん達が行っているんだが、正直に言うて助けてください！

そう言いたい思いで一杯だ!!

どうしてかって？

「私の名前は、アインハルト・ストラトスです」

「へえ、こつちも宜しく、アインハルト……　でも、私とダンくんの握手を邪魔したのは、どうしてかな？」

「ダンが迷惑していたのに気付かなかったんですか？」

「ふふふふふふっ、面白いこというね、アインハルト」

なんていって、アインハルトとエリナさんが修羅場といえる雰囲気を展開し始めたからだ！

なんつう迫力だよ！！特に、アインハルトってそんなキャラだったか！？　なんて考えていた内はまだ余裕があつたのだろう。

何しろ、夜にはもう1人合流して、俺の理性とかイロイロなものが削られていく感覚を味わう羽目になるのだから。

ただ、ルーテシアさんにガリユーとか呼ばれていた召喚獣が自分の出番がなかった事に落ち込んでいた事は、些細な事でもあるな！

第9話 アバンで存在だけ出て来た天災って前世で見たことがある気がするの

ふいゝ やつとプロットの書き直しが終わった餅っちです。

…… 最初はエリオが阿部さん化してしまう方向だったのは、秘密ですww

ネタか番外編辺りで、出してみようか？ なんてことも考えちゃったりしてますが。

文中を見てもらえれば分かる通り、原作とは違って、ギンガの参加も決定しちゃってます。

なので、模擬戦の内容が変わってくると思いますので、お楽しみくださいませ。

そして、ここでダンの実力の一端が垣間見える！かも、しれせんww

第10話 いつかは水の恐怖を乗り越えたいんだが、どうして温水プールだった

今回の話から、タイトルを微妙に変更と言つか修正……なんつう
間違いをしていたのだろうか、私は……

第10話 いつかは水の恐怖を乗り越えたいんだが、どうして温水プールだった

それからアインハルトとエリナさんの睨みあいというか、そんな感じのものはノーヴェさんの仲裁によって一旦終了という形となった。

ノーヴェさんナイス!!

とばかりにサムズアップしたら、疲れた表情をしていたからなあ。彼女って、意外に苦労人なのかね？ こういった場面で人に頼られてるっぽいし……

なんて考えつつも、俺達子供組みは川へ、なのはさんたち大人の皆様はアスレチックで訓練になった。

ただ、一つだけ言いたい。

「ノーヴェさん」

「ん？ どうした、ダン」

「俺、泳げない上に水の中って苦手なんで、パスしても良いっすか？ できれば昼食の準備の方とかに参加したい所存……」

「…… 何でも出来るって思ってたんだが、意外だな」

俺の言葉に意外そうに目を見開く皆様、確かにこの年頃になって金槌な上に水も苦手、というのは珍しいかもしれない。

だけどしゃあないやん！！苦手なんやもん！！

ただ、なのはさんやらノーヴェさんたちの目が【苦手なら、克服させてみせよう、ホトトギス】と言わんばかりにギラギラ輝いているのが気に掛かる。

ま、ましか…… ま、まままま、まさか、ねえ……？

「あらら、じゃあおばさんと一緒にお昼ご飯の準備でもしましょうか？」

「うーっす!!」

手を頬に当てて、まさに【あらあら】と言った様子を浮かべているメガー又さんから、ありがたい一言が飛んでくる。

それに大喜びで乗る俺なんだが、横で聞いていたアインハルトの機嫌が急降下したのはどうしてだろうか？ あ、行きの車の中で俺って……

「あー アインハルト？」

「なんですか？」

うわ、メツチャ怒ってる……

何しろ俺が声を掛けたら、ギロリ！と効果音が付きそうなくらいの睨みを見せられたし。

…… 一瞬マジでビビった。

「今回の埋め合わせ、今度するから…… なっ？」

「絶対ですよ？」

「おう」

俺の言葉を聞いたアインハルトは一度溜息を付いた後、ようやく薄く微笑んでくれたよ。

それからノーヴェさんたちに連れられて、アインハルトたちは裏の川へと向かって行く。

だが、ここで勢いよく手を挙げる人物が一人……

「はい！！なのはさんにフェイトさん！私もダンくんと一緒にお昼

のじゅ！」

「はい、エリナはこっちだよ、それじゃあメガーヌさん、ダンくん
美味しいお昼をよろしくね！」

「了解です！」

「それならダンくん、私、ダンくん特製の業火野菜炒め、食べたい
な！」

「らじゃっす！スバルさん！」

手を挙げたのは無論のこと、エリナさんで手を挙げた瞬間、なのは
さんとフェイトさん達の多重バインドによって拘束されている。

そして、彼女達の目が、笑ってない…… 年下の子供に変な事し
たらダメでしょうが、とでも言いたそうな様子でもある。

ズルズルと引き摺られつつ【モガー！！モガモガモー！！】と悲
鳴に似た叫び声を上げて、なのはさんたちに連れて行かれるエリナ
さん。

正直に言ってホツとしやした。

さっき、立候補したときのエリナさん、俺のチェリーを食う気満
々でギラギラと目を輝かせていて、本気で身の危険を感じたからな。

あ、後やっぱスバルさんしっかりしてるなあ、キツチリと俺に料
理の注文までしてたんだし。

「Vividって何だろう？」

「第10話 つかは水の恐怖を乗り越えたいんだが、どうして温水プールだったら浮き輪に掴まって浮かぶ程度の事は平気なんだろうか？」

「そんでもって俺は今現在メガー又さんと一緒に、昼食の準備をしていたりする。」

「作っているのは、バーベキュー形式なのか、串焼きにする野菜やら肉をちょうど良い大きさに切るのをメガー又さんがやっている。」

「俺はその横で業火野菜炒め用の野菜と調味料の準備などをやって

いたりする。

「けどやっぱりというか、量が凄まじい。

なんて考えながら、リズムカルに野菜を刻んでいる俺をメガーヌさんは感心したように見ていた。

「その年頃で包丁の扱いに慣れてるなんて、凄いわぁ」

「いやいや、店の手伝いとかしてますからね、このくらいは出来ないと戦力にならないっすから」

「それでも偉いわよ、キミくらいの年頃なんて私は自分のしたい事しかしてなかったから」

「俺も結構好き勝手やってますよ、ただ店を手伝うと小遣い多く貰えるから、やっているのが主ですし」

なんていう会話をしていたんだが、ちょっと照れくさい。

俺の母殿だろうが、ギンガさんたちだろうが、なんと言うか完全に包みこむような母性で俺に接してくる年上のおねいさん、がいなかったから余計に照れくさく感じる。

ギンガさんのは弟分、母殿のアレはバカ息子に接するものだしな、メガーヌさんみたく溢れまくる母性で包み込むような感じにほめられるのは、初めてなのさ。

だから、ちょっと頬が紅くなるのを止められない。

そんな会話を続けつつも俺とメガーヌさんの手は止まらない、メガーヌさんはスープの下拵えに入って、俺はそれに使う材料の用意と切り出し。

これらを行っていたからな。

「でも、ダンくん、本当にこっちで料理の手伝いをするだけで良かったの?」

「大丈夫ですよ」

恐らくはメガーヌさんはこう言いたいのだろうな。
皆と遊んでこなくて良かったのか? と。

まあ、これに対する返答は決まってるんだけど。

「アインハルトには埋め合わせしますし、何より……」

「何より?」

「実は、小さい頃に水の中で溺れて死に掛けた経験があつてですね、それで水が苦手になっちゃったわけなんです」

「そうなの…… でもお風呂とかは?」

「温水であれば平気です、どうも冷水、つまり普通の川とか海が完全にダメみたいで、学校とかの温水プールならなんとか浮かぶくらいはできるんで……」

俺の言葉を聞いて痛ましげな表情をするメガー又さん、まあ、聞いていてあまり楽しい話題じゃないわな。

アインハルトの機嫌が急降下したのも、俺も川の中に入らないまでも川岸にいて、そこで出来る遊びをしようって考えてくれてたんだろっつな。

うむ、今度にも近くに出来た温水プールにでも誘うか。

それから俺が温水なら平気という事を聞いたのか、メガー又さんの表情が何かを思いついたようなものになる。

「あら…… 次に来るときはルーテシアにプールも作っておいた方が良く、って言うておくと良いかも知れないわね」

「いや…… そこまで気を遣って貰うほどの事じゃないとは思いますが……？」

「ダーメ、キミみたいな年頃の子は遊んでこそ、よ、それにアインハルトちゃんなんて、キミと一緒に川で遊ぶのを楽しみにしてたんじゃないかしら？」

俺の予想を斜め上にぶつちぎる回答が返って来た！？ ま、まさかルーテシアさんってそこまで多芸な人だったとは……
凄いもんだ。

「うい、お心遣い感謝しまっす、ただ」

「ただ？」

「妹さんのルーテシアさんって多芸な人なんすね」

「え？ …… ああ」

「？」

気遣いに溢れたメガー又さんのありがたいお言葉に、俺はいろいろな意味での涙がでて来そうになる。

だが、妹さんのはずのルーテシアさんのことを言った瞬間、メガー又さんは目が点になって、驚いた様子を少し見せた後、何かに納得したように数回頷く。

なんぞ？

なんて考えていたんだが、今日一番の驚きを俺は味わう事になる。

「クスクスッ、勘違いしているみたいだけど、ルーテシアは私の【娘】よ」

「……………マジっすかあいったあああああ！！！！！！」
「？」

「だ、大丈夫ダンくん！！！！？」

そう、ルーテシアさんはメガー又さんの娘さんだった！！

という新事実だったのだから！！だけど、その時に驚きすぎて手を思い切り切っちゃまった俺は悪くない。

ブッシャアアアア！！と血を流す俺を見て慌てふためくメガー又さんだが、すぐにミッド式魔法に【偽装】して展開した回復魔法で、事なきを得る。

その後は、メガー又さんにちよつと怒られちったけど、失敗 失敗 ！とでも言ったら、余計に怒られそうだったから、言わなかったけどな。

え、偽装してまで使った回復魔法は何だった？ ベホ、と最初の部分だけ、いっておく。

それから遊び終わった皆と、訓練終わった皆さんも合流して飯も食い終わる。

俺の業火野菜炒めは彼女達の食事の直前に作ったおかげで、出来立てを出せたし、皆にも満足してもらえたんだが、やっぱり爺のあの味の完全再現は、まだ無理って事か。

いつか爺を武でも料理でも越えちやる!!

なんて決意を固めた俺は片づけをしようとしたら、ヴィヴィオちゃんやらアインハルトたちに、後は自分達がやる、と言われて追い出されてから周囲をブラブラとしている。

ただ、この時にもエリナさんは俺についてこようとしたんだが、スバルさんやティアナさん達に捕縛されていたのが印象的だったなあ。

「お、いたいた、おーいダン！」

「お、ノーヴェさん、どうしたんっすか？」

腹ごなしを兼ねながら周囲の景色を楽しみつつあるいていた俺を、

どうやら探していたらしいノーヴェさんが手を小さく振りながら近付いてくる。

どしたんだろ？

「今からスターズ、なのはさんたちが模擬戦やるってさ、暇してるなら見に行ってみたらどうだ？」

「ほう、それは興味深い」

全く持つて、実に興味深い。

既に磨耗した原作知識だが、これだけは覚えている。

彼女達はスカート姿で空中戦をやっていることをな！！

スカートで空中を舞い、戦う女性達…… 凄く、凄く、素晴らし
iiiiiii！！

「だろ？ じゃあ、あたしはアインハルトたちを探してくるからさ、
先に行つててくれ」

「うい、場所あのレイヤーっぽいもんで出来た都市で良いんです
かい？」

「おう、そこであつてさ」

「んじゃ、先に行つてまーす!!」

先程の興味深いという言葉をどうやらノーヴェさんは、違う方向で捉えてしまったらしい。

感心したように俺を見て、それからアインハルトたちを呼んでく
るために分かれたんだが、すぐに向かわなくてならない!

何故なら。

「絶対、アインハルトは気が付いて妨害してくるだろうしな!!」

という理由があつたからだ!!

急がなくては!!アガルタをこの目に焼き付ける為に!!

そうして着いたなのはさん達が訓練している場所、そこには予想通りスカート姿で空を舞う女性たちの姿がそこにあった。

まあ、それに目を奪われがちなんだが、やっぱり運動量というか密度が濃いいえるかね。

…… 爺の訓練に比べたらそれほどでもないように感じるが……
だけど、もう少し…… あともう少しで見えそうなんだけど……
ウギギ……！！

「まあ、やっぱりこのくらいでないといけないのかねえ……」

それはやっぱり思う、スバルさんたちは確か救助隊に所属しているし、フェイトさんにティアナさんたちは執務官、その他の方々も現場は違えど命懸けでもある職業だ。

鍛える事自体が自分達の生存率にも関わるんだから、当然なんだろうな。

…… あ、ピンクに黒……

ふむ、素晴らしいもの拝めたあいつつあー！！

「ダン、なにを、みて、いる、のですか……！！」

「そうです先輩！どこを見ているんですか！！」

そんなアガルタを堪能していた俺の両脇腹から、凄まじい痛みが走る！

ちらり、と見れば、アインハルトとヴィヴィオちゃんだった。

い、何時の間に…… そんなことを考えていると、ノーヴェさんが呆れとも戦慄とも付かない表情で俺を見ていた。

「…… 大人になってからやったら、なのはさんたちに確実にお仕置きされるだろうから、今日のを最後にして置けよ？」

「う、ういーっす……」

その後、コロナちゃんたちと合流してからは普通に見ていたが、アインハルトとヴィヴィオちゃんが意外に体育会系だったことには驚いたな。

アインハルトとヴィヴィオちゃんは俺にもミット打ちに付き合ってたしそうだったけど、俺は断ってコロナちゃんたちと雑談しているのだった。

そんな中で、話題に上ったのがデバイスの事、どうもコロナちゃんのデバイスをルーテシアさんが組んでいるらしく、それが明日にでも渡せる。

なんていう会話をしていたら。

「そういえば、ダンさんってデバイスとか持っているんですか？」

「そうだなあ、今はちょっとあつて持っていないなあ」

「？ 何かあつたんですか？」

そんな中でリオちゃんがして着た質問は、ある意味じゃ当然の流れだった。

前回のアバンでマンホールの中に住む天災がいる、って行つたと思うが、彼女が俺に誕生日プレゼントで以前くれたんだよな。

デバイスの形態としては、ヴィヴィオちゃんのものが一番近いかもしれないなあ。

なんて考えていたが、質問に答えなければ、なんて考えて俺は口を開く。

「まあ、何かあつたって言うよりも大改修を兼ねたオーバーホールに出しているって、感じかね」

「そうなんですか、でも、出来上がったら、見せて貰っても良いですか！？」

「おう、大丈夫だよ、終わったら一度連絡入れるから、集まるうか？」

「はい!!」

質問に答えた後で、コロナちゃんが俺に緊張気味にそういつて来る。

やっぱりこういったことに関わっていたら、デバイスとかに興味を持つちゃうんだろうな。

ただし、俺が大改修兼オーバーホールに出したデバイス名前は「アリエティス」って言うんだが、はつきり言って天才とス力さんがはっちゃけすぎて誕生したチートデバイスともいうべき仕様だしなあ。

あまり人様に見せたくはないが、キラキラと純粹に目を輝かせる女の子の瞳を曇らせるわけにもいくまい？ リオちゃんもコロナちゃんと同じく目をキラキラさせているから、興味津々なのだろう。

キャラ口さんも同じ様な感じだしね。

そんなこんなで、今日という日は過ぎていくのだった。

だけど、夜にあんな騒動が起こるなんて、思いも寄らなかったよ

……

第10話 いつかは水の恐怖を乗り越えたいんだが、どうして温水プールだった

ちなみに、もしもエリナが昼食の準備として残っていたら…… 自然を装ってダンに密着、エリナの気分が高まったところでダン気絶させて茂みにGO！と言う状況だったのは当然の流れなのかもしれない…

ですが、それはなのは達の活躍で未然に防がれる結果になりました。流石に元教え子が目の前で性犯罪を犯そうとしているのだから、元教官としては止めますよねww

因みに、ダンが川に行かなかったのは理不尽の時のような深海装備一式が手に入らなかったからです。

理不尽もあわせて、ダンにとっては水深3m以上の深さは全て深海と言っ認識ですから。

次回でギンガさん合流！そのとき、何かが起こります！
大体の予想は付いていそうで困りますけどww

第11話 広い温泉貸し切り状態独り占め！最高です！でも、それが元でま

今現在、親族の不幸により喪に服しているから新年恒例の挨拶をいえない餅つちです。

皆さんはどういう新年の迎え方をしたでしょうか？

私は酩酊状態で布団の上に寝転がりながら迎えましたww

第11話 広い温泉貸し切り状態独り占め！最高でっす！でも、それが元でま

それから夜になり、女性陣は全て風呂に入っているのではあるが、まだ夕食には早い時間に、俺はメガー又さんと一緒に夕食の準備を進めていた。

「本当にゴメンね、ダンくん、夕食の準備まで手伝ってもらっちゃって」

「いえいえ、お安い御用っすよ、それに女性陣が出た後は俺一人でのんびりと入らせてもらいますし」

昼食だけじゃなく、夕食まで手伝う事に申し訳なさが募ったのだろっ。

メガー又さんは少しすまなさそうな表情でそう言っていた。

どうして覗きに行っていないのかって？ そう思った画面の前の皆は分っていないな！覗きのプロと言うのは自分に疑惑が掛けられても逃げられる、もしくは、直接の逃げ場がある時に行くものなのさ！

こういった明らかに逃げ場なき状況で覗きをする事など、三流のやることなのだよ。

なんて考えて材料を切り出していたら。

『やあああああああ——！！！！』

「ん？ なんぞ？」

恐らくはリオちゃんであろう悲鳴と共に、人型のナニかが上空へと打ち出される光景が目に入る。

地鳴りみたいなビリビリなんていう音が聞こえるから、余程の威力を持った攻撃だったのだろう。

凄まじい勢いで星になりそうなくらいの勢いで飛んでいったし。

「あらあら、セインね、どうせ皆に悪戯して逆襲されちゃったんでしょね」

「そうつすか」

それからは何事もなく俺とメガー又さんは、一緒に夕食の準備を続けるのだった。

途中でセインさんがやってきて、俺達と一緒に晩飯の準備を始めるのだが、その時に驚いたんだが、いい加減な性格に見えて彼女って、料理が上手いな。

人って見かけによらないもんだ……

くvivividって何だろう？く

く第11話 広い温泉貸し切り状態独り占め！最高です！でも、それが元でまさかこんな事になるなんて……く

夕食も終わり、つい先程。

『広い温泉を俺一人で独り占めっすか！？ ヒヤッホーイ！！！！』

などと叫びながら一人の少年が着替えを持ってお風呂へと大喜びで走り去り。

それを追いかけて一緒に入ろうとした一人の赤髪の少女が捕縛され、糞虫状態で床に転がっている。

「むーっ！！むっむむ！！ムーッ！！！！」

などと言葉にならない呻き声を上げている少女を、ある人物達が説教している中で、メガーヌは新たな人物がここにやってきたのが、その人物からの連絡で分る。

そして、鳴らされるインターホン、彼女はパタパタと足音を立てながら玄関へと向かい扉を開ける。

「こんばんは、メガーヌさん」

「いらっしやいギンガ！待ってたわよ！」

「これから三日間、お世話になります」

「いいのよ、そんなに気にしないで！」

扉を開けた先にいたのは、スバルとよく似ているが彼女のほうが大人びた容姿に、長い髪を持つ女性と言うべき雰囲気、というかギンガである。

着替えなどが入っているらしいバッグを持っているから、彼女もここに泊まる意思があるのは明白であるし、メガーヌも彼女を嬉しそうに歓迎していた。

そんな彼女達のやり取りに気が付いたのか、全員が和気藹々としていたリビングから、スバルやセインといった女性達が姿を現す。

「あ！ギン姉、今着いたんだ！」

「ええ、スバル、ついさっき仕事が終わってから、そのまま次元船に乗って来たの」

「じゃあ、お風呂が先って事っすね」

「そうね」

ニコニコと笑顔でギンガを出迎えるスバルに、同じくニコニコとした笑みで応じるギンガ、仕事が終わってから直行で来た事を言っ

ているギンガに対して、セインはそう言っているのだが。

「あ、でも、今はダンくんが入っているからっていねえ!？」

「って、さっきまでここにいたよね!？　っていうか、私何時の間にギン姉の荷物を持ってるの!？」

「あらあら、ギンガったら、弟みたいに可愛がつてる子と一緒に入りたかったのね」

「それ絶対に違うから!？」

セインが放ったギンガ的に見逃せない一言を聞いた瞬間、彼女の行動はあまりにも早かった。

一瞬でスバルに自分の荷物を押し付けて、必要な着替えだけを抜き取った後、温泉へと向かっているのだから。

そして、あまりにもずれたことを言っているメガーヌに対して、全力でツッコミを入れる2人。

あまりにも力オスな状況が出来上がるのだった。

それから暫くして。

『つて、ちょ、ぎ、ギンガさん！！なにを！？』

というダンの悲鳴じみた声が聞こえた上に、それを聞いたアインハルトが温泉へと向かって飛び出すのも、また同時だった。

今現在俺は大喜びで体を洗っている。

ちよつと張り切りすぎてシャンプーとボディソープの泡で変な人間になってしまったが、些細な事だ！！

俺はそれら全てをお湯で洗い流して、完全に落とした後、温泉にゆつくりと浸かる。

「ふいいいいい——」

なんて間抜けな声が漏れてしまうのも仕方が無い！誰にだって経

験はあるだろう。

温泉に浸かると、こんな感じで気持ちよくなってしまふのはな。

それにこの温泉ってルーテシアさんによって色々な設備が作られているから、一人でも十分に楽しめるといっか、そっちの方が俺としては楽しめる。

「ん？」

間抜けに緩みきつた表情でそんなことを思っていた俺だが、温泉へと通じる扉が開いて誰かが入ってきた事が分る。

女性達は俺が入っている事を伝えてあるから、入らないだろう（最初は俺が子供だからと言う事で、皆さんが一緒に入れようとしたのだが、俺の必死の抵抗で見逃してもらえた）し、アインハルトはどういうスイッチがあるのか分らないが、こういう時は入って来ないだろうな。

そう思っていた俺は、入り口の方を視界に入れると、そこにいたのは……

「こんばんは、ダンくん」

「ぎ、ギンガさん！？」

ギンガさんがそこにいた！？ バスタオルに隠されているが、素晴らしい肢体が窺えるそのお姿に、俺の息子が反応してしまいそうにというか、ちょっと現在進行形で反応してしまっているのは当然だよな！

なんて考えている間に、ギンガさんは何時の間にやら体や髪を洗い終わったらしく、俺の隣に入ってくる。

妙な気恥ずかしさを覚えた俺は、ギンガさんに背を向けるんだけど、それがいけなかった。

「って、ちょ、ぎ、ギンガさん！何を！？」

「ダメじゃない、ダンくん、肩まで浸からないと風邪、引いちゃうからね」

背後からギンガさんに抱きしめられたのだ！

後頭部に当たるギンガさんの素晴らしいおっぱいの感触と、俺の体全体で感じる彼女の体の柔らかさ。

「ふう〜」

「ひ、ひいあ!？」

ギンガさんが艶やかな色を持って、俺の首筋に息を吹きかけてくる。

それに俺は思わず変な声を上げてしまっているんだが、俺の反応も彼女は面白いと言うか、予想していたらしく少しの小さな笑い声と言うか、クスクスという声を上げて、俺の固くなりつつある男の象徴へと手が伸びていく。

こ、これ以上はやべエ!!? なんて考えてギンガさんの方を振り向こうとした瞬間に、再び温泉へと続く扉が開く音が聞こえる。

「ダン!! 何があっただんですか!？」

そういつて入ってきたのは、アインハルトだった。

だが、この光景を最後として、俺は意識がブラックアウトしてしまっていた。

ただし、ギンガさんはとくに大反応を示して、存在を誇示している俺のをつかんでいる感触も味わっていたけどね!!

あ、俺の象徴をつかんでいるギンガさんの手が前後に軽く動いた……

それから次の日。

俺は、ルーテシアさんに案内されていた部屋で目を覚ます。

「おはよう、ダンくん」

ベッドに腰掛けるエリナさんの挨拶と共に。

俺は暫く自身の身に何が起きているのか、尚且つ、あれからどう
いう状況になったのか。

それが全く分らなかったのでじっとしていたが、まあ、ちょっと
やるべきことというか、そんなことは決まっているかね。
なんて考えて、俺は頭をぼりぼりと掻いていた。

「エリナさん、俺の端末とってもらえます?」

「はい、どうぞ」

そう、携帯型の端末に用がある。

俺はそれの短縮ダイヤルをプッシュすると、ある一人のお方の番号を呼び出す。

「フェイトさん、エリナさんが俺の部屋に来てるんですが……」

『ゴメンね、すぐに行くから』

それからエリナさんは、無表情&棒読みの声というフェイトさんに引き摺られる形で、俺の部屋を強制退去させられるのだった。

エリナさんが出て行かされて静かになり、一人なった俺は、真剣と言つかそんな感じで昨日の夜、アインハルトが温泉に突入してきたときから後を思い出そうとしたのだが。

「……」

そして俺は、まだ自身に降りかかる恐怖が終わっていないかったことを知る。

「それじゃ、今から大人と子供全員参加の7対7の模擬戦開始だから、皆準備をするように！」

「そんじゃ、俺は見物といきますか」

「何を言っているのですか？ ダン」

「は？」

「そうだぞ、お前も参加する事になっているからな、アインハルトとギンガのたつての希望で」

「あ？」

なにそれこわい。

第11話 広い温泉貸し切り状態独り占め！最高です！でも、それが元でま

次回、ようやくダンが本格戦闘を行います！

その際に明らかになる意外な戦闘法とは！？ ご期待いただけたら
ありがたいです。

友人一同からは「ねーよｗｗｗｗｗｗ」と言われた形です。

そして軽いQ&A

Q：ダンは脱！童貞！！したの？

A：NO アインハルトがいなかったら……

とだけはいつておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062z/>

V i v i d って何だろう？

2012年1月1日22時25分発行